

人文会 ニュース

jinbunkai news

August 2022

NO. 141

1 代表幹事挨拶

2 15分で読む

いま読み返すフロイトの戦争論

——自己愛による破壊から死の欲動へ

20 書店現場から

日中国交正常化50周年と東方書店

26 図書館レポート

図書館をもっと楽しく……カーリル

38 編集者が語るこの叢書・このシリーズ 24

世界を読み解く一冊の本

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

片桐幹夫

片岡一竹

田原陽介

吉本龍司

上村和馬



www.jinbunkai.com

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

美とミソジニー

美容行為の政治学

シーラ・ジェフリーズ著 / GCジャパン
翻訳グループ訳 美しくなろうとするのは「個人の選択」なのか? 「美」に潜む男性支配を明らかにする、ラディカルフェミニズムの名著。 ◎3,520 円

女性兵士という難問

ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学
佐藤文香著 女性兵士は男女平等の象徴か? 戦争や軍隊で、女性兵士が果たすことを求められてきた役割とその効果に着目し、批判的に検証する。

◎2,640 円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

戦争抵抗の倫理

大戦期アメリカの良心的戦争拒否者たち

第次・第二次大戦下のアメリカで、投獄や拷問、周囲の冷遇に耐えながら、徴兵などの戦争協力をあくまで拒否した者たち。膨大な史料から浮かび上がるその思想と行動を検証する。

【著】師井勇一
【価格】3,520 円(税込)

地域でつくる・地域をつくる メディアとアーカイブ

地域のメディアやアーカイブが果たす役割や課題について、全国各地の様々な事例をもとに考察。地域の情報環境整備、地域からの情報発信と交流の場づくりなどについて論じる。

【編】松本恭幸
【価格】2,420 円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

ソーシャルメディア解体全書

山口真一

税込2970円

「ソーシャルメディアの問題を徹底分析。誰もが発信者となりうる「人類総メディア時代」必携

ネット分断への処方箋

田中辰雄

税込2420円

「ネット炎上の研究」で注目を集めた著者がネット分断を打開するための最善策を提示する

良妻賢母という規範 新装改訂版

小山静子

税込3300円

良妻賢母思想の歴史の変遷を解明した名著。初版を詳細に見直し、新たに序文を加えて改訂

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshibo.co.jp>

松本直子

岡村昭彦を探して

ベトナム戦争を報じた国際報道写真家の光と影

ジャーナリズムにとつて報道写真にとつて「真実」とは何か?——ベトナム戦争をいち早く報じ、「第二のキャバ」と呼ばれた岡村昭彦。反戦を訴え、生命倫理を説くその活躍をまぶしく見ていた姪は一方で、語り継がれてきた逸話に違和感を覚える。真の姿を求めた旅の軌跡。▼定価2750円10%税込

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

代表幹事挨拶

みずず書房 片桐幹夫

2022年5月20日に行われた人文会年次総会において、代表幹事を拝命しました。変わらぬご指導・ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

他の役員人事として、書記幹事・水口大介氏（創元社）、会計幹事・片山伸治氏（吉川弘文館）、春秋社の吉岡聡氏が〈販売・企画〉委員会委員長、青土社の森卓巳氏が〈調査・研修〉委員会委員長、白水社の岩野忠昭氏は〈広報〉委員会委員長として役員全員が再任となり、この6名の幹事で1年間会の運営を担うこととなります。また、各委員会の副委員長として、〈販売・企画〉委員会副委員長に段塚省吾氏（紀伊國屋書店）、〈調査・研修〉委員会副委員長に澤畑壘氏（東京大学出版会）、〈広報〉委員会副委員長に乙子智氏（慶應義塾大学出版会）、こちらも全員が再任されました。

新型コロナウイルスの感染拡大もようやく落ち着いてきました。今期、人文会はコロナ禍で経験したオンラインでの会議や研修も含め、積極的に人的な交流を行う中で、新たな方向性を見出していきたいと考えています。特に、店頭での具体的な課題に書店様と共に取り組んで参ります。また、業界外の方々との交流と研修の中で新しい知見を得たいと考えています。

人文会は諸先輩方の意志を継承しつつ、10年、20年先の人文書出版のあり方を模索して参ります。本年も、役員、各委員へのご指導・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

いま読み返すフロイトの戦争論

—— 自己愛による破壊から死の欲動へ

はじめに——理解に御用心！

ロシアによるウクライナ侵攻が始まってから四ヵ月が経過した。開戦当初ロシア軍が画策していた電撃戦による侵攻の早期決着は失敗に終わり、現在に至るも戦況はなお先行き不透明の状態を保っている。この原稿を書いている二〇二二年六月二十三日現在では、本日から始まる欧州連合（EU）首脳会議において予想されるウクライナのEU加盟候補国承認がロシアによる攻撃の激化を招く可能性について議論がなされている。

この歴史的イベントに対して精神分析はどう反応できるの

片岡 一竹（早稲田大学大学院）

か。正直に言えばさほど大きなことはできそうにない。ウクライナやロシアにおける最新の状況はジャーナリストたちが情報を与えてくれるだろう。目下の侵攻を原因づけた各国間の情勢については国際政治学者に、その文脈を成す過去の背景については歴史学者に学ぶべきである。文学者は日本において充分に知られているとは言いがたい。ウクライナ文学や文化について教えてくれるかもしれない。だが精神分析家や私のような精神分析研究者は、単に一市民として当然担うべき領分を超えたところでいったい何ができるだろうか。

あるいはこの度の侵攻について誰よりもその責を問われるべきウラジミール・プーチンの「精神分析」を望む

向きもあろうし、それを行えば少なくとも注目は集まるかもしれない。先の四月九日にフランスのラジオ局「Europe 1」のインタビューに答えた精神分析家のエリザベート・ルディネスコが語るには、プーチンは自分が本当に一九四五年にいてと考えており、現実離れたロジックの中に身を置いているという点で、あらゆる独裁者がそうであるように「パラノイア的」である（とはいえば彼女も話の流れからそのように発言しただけであり、それほどシリアスな形で述べているわけではないのだが）。しかしそれは世界中の大半の人々の頭の中にすでに存在する「プーチンは気が触れている」というけだし自明な観念を専門用語によって言い換えるに止ま¹っており、私たちの印象に学問的な後ろ盾を与えるに過ぎない。後にすぐ参照する論考の中でフロイトは大戦下において学問が「激情に左右されない不偏不党性」を失い、「精神科医が敵の精神的ないし心的障碍を診断する」(GW10:324)状況を憂いているが、仮に私たちがプーチンの「精神障碍」を云々するとすれば、いかにもその轍を踏んでいるように思えてならない。

そもそも精神分析とは患者（分析主体）自らの心的探究

に基づく実践であって、分析家はあくまで主体の「心の旅」の同行者に過ぎず、その名に反して患者に関する分析を提示するような立場にはない、という精神分析の大原則を改めて確認しておこう。（患者を）「理解しないように用心せよ！ Gardez-vous de comprendre !」(E:471)という分析家たちに対するラカンの警句も思い出される。もっともここで言う「理解」というチームにはヤスパース以来精神病理学の基本用語の一つを担ってきた「了解 Verstehen/compréhension」概念の批判というニュアンスが含まれているから複雑ではあるが、少なくとも誰か他の人物の精神を理解するために分析的概念を頼りにするようなことは謹んでしかるべきである。

トラウマは過去を書き換える

ただもし精神分析の経験が何か役に立つとすれば、それは今後より顕在化していくと思われる、目下の侵攻が産み出す広い意味での「トラウマ」に関するものだろう²。かの地で戦禍を被っている人々は言うに及ばず、メディアを通じてウクライナ侵攻の映像や画像、文章などに触

れている人々もまた、それらの体験が及ぼすトラウマ的効果と無縁ではない。

いったい何らかのショックに見舞われた人がそれにトラウマを以って答えるというのは自然な反応であり、そこに精神分析が容喙すべき病理的なものは見出されない。大切な存在を失った後の喪の悲しみが時とともに消え失せていくように、トラウマもまた原因となった出来事に関する適切な作業が行われればしかるべく克服される——と一見すれば思えるだろう。だが時として出来事についてすべてを語りつくしてもなおトラウマが残存し続けるということがある。

それはあるトラウマ的出来事は往々にして過去、他の出来事をトラウマ化してしまふように働くからである。トラウマは当人の歴史そのものを全体的に組み替えてしまふ。トラウマを与える事件は、それが起きた後の未来のみならずそれが起こる前の過去にまで影響を及ぼすのである。

そして根源にまで遡れば、あらゆる人々はその幼少期において必然的にある克服不能なトラウマ——還元するとそれは死と性の〈謎〉、つまりラカンが言う「現実

的なもの *le réel*」との出会いによって産み出されるものだ——を被り、このトラウマ的出来事に対する反応のあり方が個人の根本的な生き方を無意識的な形で規定する。すなわちその際に形成されたその人自身の〈防衛〉のパターンが以後の人生において絶えず繰り返され、こうした反復が作り出すものがその人の性格とかあるいは「業」などと呼ばれるものである。

人は反復の生き物だ。いったん身の守り方が確立されてしまうと、状況が変わってそれがもはや不適切になったり、もはや主体に苦しみを与えるものでしなくなったりしても、私たちは最初の身の守り方を強迫的に反復し続ける。

しかしその後の人生の途上で出会うトラウマ的出来事は防衛の反復的モードを暴力的な仕方で破壊し、私たちを改めて根源的なトラウマへ裸のまま直面させる。そのためそれは時として当人を苦しめていた強迫的な反復の様態を宙づりにするが、しかしより激しい別の苦しみを産み出すだろう。

トラウマは善かれ悪しかれ人生のターニングポイントを構成する。根源的なトラウマへ新たに対処しな

とによって〈現実的なもの〉に対する別の防衛の仕方へ、つまりは別の生き方へと足を踏み出す契機となるかもしれない——だが絶望させるトラウマの苦しみを前にした人にとって、そのような楽観など無責任な慰めにしか響かないだろうが。

しかしいずれにせよ、主体がトラウマと向き合うことによって、単にそれ以前の「健康な」状態を回復するのではなく——こうした「健康」とはそれが失われた後になって遡及的に過去の中に創造されるものに過ぎないのだ——その人自身の根源的なトラウマに対する新しい主体的応答を見つけていくことが精神分析の目標である。そうした精神的なトラウマへのアプローチを必要とする人が、この侵攻によって将来（あるいはすでに今なお）生じてくるということは充分考えられるだろう。

戦争による欲動の原初状態への回帰

——「戦争と死についての時評」——

さて、長くなったが以上を前置きとして本題に入ると、この小論に与えられた主題は「今、『ひととはなぜ戦争をするのか』に還る」である。一九三二年九月、ナチズム

の危機がドイツのみならずフロイトの住むオーストリアにおいても緊迫化する中、当時の国際連盟の下部組織である「国際知的協力機構」の求めにより、同機構が上梓していた知識人間の交換書簡叢書の一環として、フロイトは物理学者アインシュタインと書簡を交わし、それが *Warum Krieg?*（直訳すると『なぜ戦争なのか？』の表題の下）パリにおいて刊行された。これが今日『ひととはなぜ戦争をするのか』の邦題で知られるテキストである。[＊]だがその知名度に反して、そこまで精神分析として画期的な議論がこのテキスト内で提示されているとも言えず、実際フロイト自身が後に「アインシュタインとの退屈で不毛な議論」云々とぶっちゃけていたと言われている。

だがこのテキストに限らず、戦争を主題としたフロイトの他のテキストを年代順にさらいながら道程を追っていくと、より興味深い論点が見えてくる。フロイトの戦争論はどれも小品と言うべきものだが、しかし執筆当時のフロイトの理論変遷を反映しており、各々を比較して読むとフロイト理論の推移が、そしてそれと並行した彼の戦争観の変遷が浮かび上がってくるだろう。

第一次世界大戦の開戦から半年後の一九一五年三月から四月にかけてフロイトは小論「戦争と死についての時評」を執筆し、このテクストはフロイト自ら発刊に尽力した精神分析専門誌『イマーゴ』第四巻第一号へ発表された。議論の要旨を一言で述べれば、当時激化を続けていたこのあまりに残酷であまりに容赦を知らない大戦は人間的道徳性と死に関する文化的営為を破壊し、私たちの中に深い幻滅をもたらす。「戦争は文化が後から私たちに被せた層を剥ぎ取り、私たちの中に再び原人間を出現させる」(GW10:354)。

しかるに幻滅があるということは幻想があったこととの証である。晩年の著作『文化の中の居心地悪さ』(一九三〇年)に至るまで保持され続けるフロイトの文化(ないし文明)に対する意見は、この論考においても明言されているように「文化は欲動満足の断念によって獲得されたものであり、新たにやってくる者みなに、その欲動を断念することを要求する」(GW10:333)というものだ。ここで言う「文化」の具体的なありさまを、フロイトは

「道徳」「死」という観点から分析する。

道徳に関して言えば、それは自己愛的で残忍な原始的状态の欲動が内的要因(愛されるために「悪い」欲動満足を手放す)および外的要因(文化的環境の要求を代表する教育による強迫)によって脅かされ、反動形成を通じて利他的で社会的な欲動へと作り変えられることに根差している。また死については元来「私たちの中には死を信じることに傾くような欲動的なものは全く存しない」(GW10:350)のであって、愛しい人の死に際する悲しみと、あるいは感情両個性ゆえに愛しい人を殺してしまったことがもたらす罪責感——『トータルムとタブー』(一九一三年)でフロイトが論じた父殺しという原罪——とが文化において「汝殺すなかれ」の戒律を産み出し、殺人の禁止と死の不安を二次的に生じさせたに過ぎない。

だが戦争はそうした文化的構築物を無化して欲動の水準において人間を退行させ、「文化の持続的圧力をかりそめの間逃れることや、差し止められていた欲動に一時的な満足を認めることを促進した」(GW10:336)。したがってまさに戦争によって、それまで夢を始めたとした無意識の形成物の中でのしか姿を見せることを許さなかつ

た欲動の原初的狀態を生きる人間の姿が白日の下に晒され、欲動に対する文化的抑圧の偽善性を、つまり文化の中で人間が「心理学的には分不相応に生きてきた」(GW10:354) 事実を暴露してしまう。

このように個々人への欲動断念の要求により構築される文化が戦争により破壊されて幻滅が生じるという図式はフロイトの戦争論の基本構図を成す。同様の主張は、前年十二月に書かれた友人の精神病理学者フレデリック・ヴァン・エーデン宛ての書簡でもなされており、そこでフロイトは世の不評を買ってきた精神分析の主張、すなわち①人間の原始的で残忍な悪しき欲動は消滅せず無意識の中で再活性化の機会を絶えずうかがっていること、また②人間の知性は欲動依存的であり欲動の手先に過ぎないことが、文明化された国民の戦地での違法な残虐行為およびその正当化という事実によって証明されてしまったと論じている(GWNb:697-698)。

戦争が破壊する対象への喪の悲しみ——「無常」

このテキストと基本的には同じ主張をなぞりつつも

異なった論点が挿入されている点で興味深いのが、翌一九一六年に発表されたテキスト「無常」である。そこでフロイトは、あらゆる美しいものを待ち受ける消滅という運命に心及んで目の前の自然の美しさを享受できなかった友人に反論したというエピソードを披露している。フロイト曰く、無常に面して抱く厭世観と無常への反抗として永遠を追求する傾向が存するのは真実だが、しかし本当は「無常であることの価値とは、過ぎ行く時の中の希少価値なのだ。享受の可能性が狭められることによって、「かえって」その貴重さが高められるのである」(GW10:359)。

フロイトが分析するには、友人が美を享受できなかったのは、大切な存在の喪失がもたらす喪の悲しみに対する心の反抗ゆえであり、それは私たちの自我の中にすら一部取り入れられているリビドーの対象に対する自我の執着の強さを物語っている。しかるに第一次大戦は美しい自然のみならず人間が作り上げた芸術作品、さらには文化や人間性に対する誇りと尊敬すら打ち砕き、「私たちの欲動生活を剥き出しにさせ、私たちの高潔さにより幾世紀にわたる教育を通してずっと飼いならされてきた

と信じられていた、私たちの内なる悪霊を解き放った」(GW10:360)。

だが人間の貴重な財産が失われたからといってそれらが価値のないものになってしまったわけではない。どれほど痛ましい喪の悲しみもいつかは尽きるものであり、喪の作業を完遂したりビドーは再び自由を取り戻し、元の対象と同じ、あるいはより貴重な別の代替物を見つけ出す。この戦争が喪失させたものについても同じことが言えるだろう、と彼は論を結ぶ。

「戦争と死についての時評」が戦争を契機とした欲動の原初状態への回帰という欲動を中心とした問題を扱っているとするれば、「無常」は前年に発表された「喪とメラニコリー」(一九一五年)に関する論文の議論を介在させることによって、対象、それも対象喪失という新たな主題に着手しているのがわかる。この差異は決して小さなものではない。

「欲動か対象か」という重点化の違いはフロイト以後にも受け継がれる精神分析の枢要問題の一つである。「欲動と欲動運命」(一九一五年)の議論が定式化しているように、精神分析における対象概念は初め自我の対象で

はなく欲動の対象として措定され、欲動の満足を可能にするために欲動に結び付く偶然的で可変的なものに過ぎないと主張されており(GW10:215)、特段重要な地位を割り与えられていなかった。だが一方で同年の「喪とメラニコリー」においては自我と対象の関係が粗上に載せられ、愛する対象の喪失が「断念した対象への自我の同一化」(GW10:435)を導くと論じられる。さらに時が経った『自我とエス』(一九二三年)においては自我そのものが「断念された対象備給の沈殿物」(GW13:257)として形成されていると明確に主張されるようになる。

このように次第に対象の概念は欲動の単なる可変的な参照項という域を超えて主体の不可欠な構成要素としてその重要性を高めていくようになる^{*}。したがって「無常」において戦争が破壊する対象に対する喪という観点が導入された背景には、フロイト理論における対象概念のプレゼンスの高まりの萌芽を見て取ることができるかもしれない。

また「無常」においてもう一点特筆に値するのは、この小論が戦争による欲動の原初状態への回帰がもたらす破壊という側面に焦点を当てているという点である。

いったい主体の自己保存や欲動の満足を妨害するもの、ないしは感情両価性によって愛の裏面を成す形で憎悪が向けられる対象への破壊願望、は精神分析の創設以来絶えず問題にされてきた主題であった。例えば『夢解釈』（一八九九年）においては愛する家族の死を巡る夢が数例報告されており、その中のいくつかは、対象があまりに親密であるがゆえに抑圧に服さざるを得なかった、かの人物の死を求める願望として解釈される。^{*7} またそもそも男児のエディプスコンプレクスで問題になる父殺しも、神話におけるエディプスが行ったような父の実際の殺害ではなく、あくまでその願望に過ぎない。^{*8}

あるいはより精神的な語彙を用いれば、殺害は主体の心的現実（psychische Realität）の水準で行われるものであり、外在する物質的現実（materielle Realität）におけるそれではない。だが Benhaïm [2007:179] が的確に述べるように、「それまでフロイトは物質的現実を心的現実から明瞭に区別しており、殺害は内的場面、心的場面——夢ないし幻想の場面——において行われていたのだとすれば、それに対して戦争に関する彼の考察はこうした見方を完璧に覆すことになる。戦争はこの「二つの現実

の」隔たりを消し去り、心的現実と物質的現実、は混同され、そうして外的場面において殺害が実行されるのである」。この著者はこうした覆しが「戦争と死についての時評」においてなされたと論じているが、精確にはこのテクストにおいてフロイトははまだ心的現実における死の願望という水準に比較的傾いているように見え、^{*9}「無常」において破壊された対象への喪が問題にされることによってより明確に物質的現実における殺害、すなわち対象破壊というテーマが前面化するようになったと私たちには思われる。

〈それ〉が破壊する——「ひとはなぜ戦争をするのか」

心的現実における殺害願望から物質的現実における殺戮へ——だがこの覆しはフロイトをしてもう一つ別の現実、に直面させたのではないだろうか。それは心的現実にも物質的なそれにも還元されない、知覚や言述が不可能であるにも拘らず主体にとって最も根源的かつトラウマ的な現実、すなわちラカンが「現実的なもの」と呼んだ現実である。こうした主張が単なる思い付きではない

ことは、「戦争と死についての時評」および「無常」と「ひとはなぜ戦争をするのか」を隔てる時期に起きたことを考慮すれば明らかになる。

このテキストがアインシュタインとの交換書簡であることは先述したが、フロイトの書簡に先んじて書かれたアインシュタインの書簡の中で提起されていた問題は、人間を戦争という災厄から解放する手段は存在するのか、そしてそのために当然求められるであろう、あらゆる国家間紛争を調停する超国家的組織がその効力を発揮するのに十分な権力をもつことが可能だろうかという問いである。だがフロイトはこの問いに正面からは答えておらず、「そもそも戦争というものは自然の道理に適うもので、生物学的にも歴とした基礎を持っており、実際問題としてほとんど避けがたいものに思われます」(GW16:24)とかなり悲観的な見解を示している。

フロイトのこのペシミズムは、しかしすでに戦争に関するフロイトの二つの文献を参照した私たちには容易に理解できるだろう。毎度のことながらアインシュタインへの手紙の中でもフロイトは、文化の発展とは「欲動の目的の遷移がますます進行していき、欲動の蠢きが制限

されること」(GW16:26)にある一方、戦争は「文化の過程によって私たちが強いられた心理的な態度に真つ向から歯向かう」(ibid.)ものであるという主張を繰り返している。個人がいかに発展(成長)しようと幼児的な欲動の原初状態が不壊のものに止まると同じように、文化が発展して暴力を禁じる法がいかに整備されようと——そもそも法自体が根源的には剥き出しの暴力であって、常に暴力による支持を必要とするものであり(GW16:19-20)——それが断念を強いる不埒な欲動の蠢きはいつまでも存立し続け、歴史の途上でいつかは戦争を招き入れ、元来の状態への退行が絶えず生じることになる。この点でフロイトの戦争論は常に一貫している。

しかしながらこの手紙と先述の二つの文章の間に歴然と存在する違いは、そこで想定されている欲動の原初状態そのものに関するフロイトの考えが変化したことにある。先述の通り、とりわけ「戦争と死についての時評」において、他者の死を願望し時にそれを実行しさえする欲動的な蠢きは自己愛的なものとしてその性質が論じられていた。だが「ひとはなぜ戦争をするのか」においては必ずしも自己愛的なものには基づかない、それどころ

か場合によっては自己そのものすら破壊の対象として見出す根源的な「攻撃欲動ないし破壊欲動」(GWG:30)が措定されている。この言葉が指すのは有名な『快原理の彼岸』(一九二〇年)において導入された「死の欲動」(タナトス)である。タナトスとは破壊と解体によって万物を生命以前の原初状態——すなわち死——へと連れ戻そうとする欲動であり、それは「維持し結合しようとする欲動群」(群欲動)である「生の欲動」ないしエロスと対立しつつ欲動の根源的な二元論を構築している。

タナトスの存在を認める以上、私たちは戦争を通じて欲動の原初状態の再活性化をより深刻なものとして捉えなければならないことになる。というのでも人が争いを反復するのは、もはや自らの敵の排除を願う利己的で自己愛的な欲動の蠢きに由来することではないからである。

『自我とエス』において確立された第二局所論が明確に示す通り、タナトスの(あるいはまたエロスの)働きは狭義の自己や自我を超えている。タナトスは主体と対象、あるいは同じことだが内界と外界の区別が成立する以前の原初的な心的状態——ただ非人称的な仕方ですら「それ」と呼び表すしかないものを貫く欲動の蠢きであり、自我

が成立したのちも人間の心的装置の根源的な構成要素として存続し続ける。人間はその根本に自己すらをも破壊の手にかけんとする危険な欲動の蠢きを孕んでいるのである。

このことを個人の心的装置から人類全体へと類比的に拡大すれば、戦争を通じて繰り返されるのは「それが破壊する」という出来事であり、例えば核戦争を通じて地球から人間の住処が消え、したがってもはや対抗する各陣営のいずれもが勝利を収めえなくなろうと、誰のためでもないただ純粹なる破壊だけが展開されることすらあるだろう。それこそがタナトスの蠢きである。

むしろこれは思弁に過ぎるかもしれないが、しかし私たちがタナトスという概念を深刻に捉えるならばそう主張しても過言ではないし、そしてこの度のロシアによるウクライナ侵攻が再活性化させた核戦争の不安は、こうしたヴィジョンに一定のリアリティを与えてくれるだろう。戦争はもはや誰のためのものでもなくなっている。^{*10}

死という謎

死の欲動という概念の導入により、「ひととはなぜ戦争をするのか」は「戦争と死についての時評」や「無常」よりもなお悲観的な結論を提示することになったように思われる。フロイトをしてかくも絶望的な見解へと導いた大きな要因の一つは、やはり第一次世界大戦であった。

特に大戦終了後まもなく書かれた『快原理の彼岸』の冒頭から扱われる(GW13:9³⁴)戦争帰りの兵士たちに広く見られたトラウマ神経症(戦争神経症)の問題は、一八九七年に誘惑理論(ヒステリー)の一般的病因としての性的トラウマ説)の放棄以来後景に退いていたトラウマの問題に改めて焦点を当てた。トラウマに苦しむ元兵士が繰り返し見て已まない悪夢は「夢は願望充足である」という従来のフロイト夢理論の大黒柱の再考を迫り、結局フロイトは、それまで精神分析の欲動論と対象論とを共に根本的に基礎づけていた快原理を超える、より根源的な何かを探さなければならなくなった。

始めのうちそれは反復強迫、すなわち「快のいかなる

可能性も含まない過去の体験をも再びもちきたらすということ」(GW13:18)として見出され、快原理に例外があることが認められた。そしておそらくフロイト自身制御できていないまま突き進む「思弁」の流れは、ついに、欲動が「あらゆる欲動のより以前の状態を再興しようとする、生命ある有機体に内在する衝動」(GW13:38)である以上、その究極的な目標は生命以前の死であるという面食らわせる結論へと至る。

ここで発見されたものこそ精神分析の内外にスキヤンダルを巻き起こした死の欲動であり、そして何よりそれを語るフロイト自身がこの結論に一番驚いている。以上の議論を終えた後でフロイトは「しかしよく考えてみるなら、そんなことはありえないではないか!」(GW13:41)と取り乱したように書き連ね——およそ一般的な論文の中で目にするのではない一文だ——死の欲動を否定するための根拠を豊富な生物学的議論への参照によって見つけ出そうとするが失敗に終わり(GW13:47-53)。³⁵ 結局エロスとの二元論を前提としたうえで(GW13:57)この議論を認めざるを得なくなる。

分析理論の根幹を成す快原理を守るために死の欲動を

否定しようと何度も試行錯誤しながらも失敗し、次第に死の欲動の強大さを認めざるを得なくなったフロイトはついに「快原理はまさしく死の欲動に仕えているように思われる」(GW13:69)として快原理そのものを死の欲動に従属させてしまう。あたかもトラウマ的出来事に直面して刺激保護が破綻してしまった神経症患者が夢において何度もその場面を反復することで「刺激制覇を後からやり直そうとしている」(GW13:32)かのようにフロイトはこの論文の中で振る舞っており、死の欲動に関するフロイトの探求はそれ自体がトラウマを前にした反復強迫的構造を呈してしまっている。^{*11}

大戦の激化の中で、心的現実における殺害の空想が物質的現実における大量虐殺へと送り返され、自己愛に還元されえない破壊欲動の根源的性質が明るみに出されていくにつき、フロイトはそれまでの精神分析を規定してきた快原理を——つまり私たち個人においては「反復される防衛のモード」に相当するものを——保っておくことがもはやできなくなったのではないか。戦争における実際の殺戮や破壊は、あらゆる人間にとって宿命的であるにも拘らず根源的に〈謎〉のままに止まる「死」

という問題の現実的な切実さをフロイトに突きつけ、過去(の理論)を否定することで彼を懊悩させながらも、新たな理論展開へと踏み出すきっかけの一つを与えたのではないか。

そしてフロイトは死の欲動という受け入れがたい概念を認めることによって、この死の〈現実〉に応えようとした。そのことで精神分析実践の在り方が、いわばこの実践全体としての「生き方」がどれほど変わったかはいまでもない。

おわりに

抽象的な議論を行っている際は常に気を付けるべきだが、壮大な論旨にかまけて現実から遊離するほどに不毛な観念論に終始してしまう。本稿では最終的に戦争の問題を欲動の一根源としての死の欲動の問題へと接続し、人が自己愛を目的として行う破壊ではない「^{エス}それ」が破壊する」というタナトスの働きに根差すものとして戦争を語ったが、このことがいわゆる人間の責任を曖昧化するために用いられることには頑として反対しなければ

ばならない。この度の事件は誰の目にも明らかのようにロシアを加害者、ウクライナを被害者とする侵攻でありしたがってロシアは、そして何よりウラジミール・プーチンはこの戦争犯罪の責任を追及される必要がある。というありふれた——しかし繰り返し唱えることに意味がある——この現実的スローガンを最後に明記することによって、あまりに理屈に抛りすぎたこの小論の償いをしよう。

注

* 1 以下のサイトで動画と要旨を確認できる。 <https://www.europe1.fr/societe/guerre-en-ukraine-que-dit-la-psychanalyse-sur-le-conflic-4104633> (二〇二二年六月二十三日閲覧)

* 2 私たちは精神分析のトラウマ論に関するソニア・キリアコの優れた著作『稲妻に打たれた欲望』(二〇一二年)の翻訳を向井雅明監訳のもと二〇一六年に誠信書房から上梓したが、本書および精神分析的トラウマ論全般が日本においていまだ充分に理解されているとは言いがたい。以下のトラウマに関する議論の詳細については同書を参照されたい。

* 3 この点について有名なのはフロイトが『心理学草案』(一八九五年)において取り上げたエマという症例である(GWNb:445-448)。彼女は十二歳のころにある店に一人であつた際に店員二人が笑いあうのを目撃したことにトラウマ

を受け神経症的症状を見せていたが、この出来事自体はトラウマの決定要因ではなく、彼女自身意識していなかったが、八歳のころに受けた性的暴行体験(店に一人である時に店員がはくそ、笑みながら彼女の性器に触れたこと)が背後で原因を担っていた。暴行を受けた当時には性的領域における発達の未熟さゆえに理解できなかった体験が、十分に成熟した後にはそれと部分的に共通する別の体験を経ることによって呼び起こされ、その際に初めて八歳のころの体験がトラウマとしての価値を担うようになったのである。ここでは「未来が(トラウマとしての)過去を生み出す」という精神分析における独自の逆説的な時間論理(「事後性」)が機能している。

* 4 このことについては国際精神分析協会から独立した自身の《学派》(精神分析団体)のマニフェストの中でラカンが述べている次の一言を是非とも参照すべきである。「精神分析の経験は、治療法からは本質的に切り離して考えるべきだ。〔中略〕治療法に与えることができる唯一の定義は、「最初の状態を取り戻すこと」というものだ」と私はみている。これはまさに精神分析の中では設定することのできない定義である」(AE:246)。治療法(ここでは医学的なもの)がトラウマ治療の中で想定しているのがトラウマを被る前の「最初の状態」の回復であるとすれば、精神分析の目的はそこにはない。

* 5 このフロイトのテキストの邦訳はいくつかあるが、二〇一六年に講談社(講談社学術文庫)から発行された浅見昇吾訳『ひとはなぜ戦争をするのか』にはフロイトとアインシュタインの文章がどちらも収録されており便利である。ただし本稿

においては『フロイト全集』第二十巻所収の高田珠樹訳（戦争はなぜに）を参照しながら私自身で新たに訳出した。

- * 6 この点については手前味噌ながら片岡 [2021:57-58] をい参看されたい。後述するエロスとタナトス、サド・マゾヒズムについても同論を参照のこと。

- * 7 たとえば自分の娘が棺の中に死んで横たわっているという、ある女性が見た夢は、この子を妊娠していた当時に抱いていた胎児の死に対する願望を表すとフロイトは解釈している（GW2:3:159-160）。

- * 8 にも拘らずフロイトは『トーテムとタブー』などにおいて人類史において原父殺害が実際に生じたことを執拗に主張しようとしており、すなわち心的現実の根拠をあくまで物質的現実の中に求めるという分裂した態度をとっているが、この問題については本稿の手に余るので扱わない。総田 [2003:127] でもこの問題が扱われているので是非参照されたい。

- * 9 「原人間とは異なり」私たちの無意識は殺害を実行するわけではなく、単にそれを考えたり望んだりするだけである。しかしこのような心的現実を、実際の現実と比べて過小評価するとしたら、それは不当だろう」（GW16:351）。とはいえ一方でフロイトは戦争が現代の文明人の中に原人間を復活させると述べているのだから、確かにそこでは実際の殺害が問題になっているとも言えよう。しかしこのテクストは対象に関する考察を欠いているためにその点がいまい先鋭化されていない。

- * 10 とはいえ「ひとはなぜ戦争をするのか」においてフロイト

が戦争を単にタナトスの発現として考えているのだとしたらあまりにナイーブだろう。彼が主張する通り、タナトスの働きを見えにくくしているのは、それがほとんどの——あるいはすべての——場合においてエロスと混合され協働的に働くという事実である。例えばサディズム、マゾヒズムなどはまさにこうした両欲動の混合を例示している。戦争を含めた「歴史上の蛮行」においてもこうした混淆が生じている（GW16:21）。ところで今度のウクライナ侵攻の大義名分を担うプーチンの主張は曰く「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性」であり、侵攻はウクライナの親ロシア派勢力を「ネオナチの手から救い出し」、失われたこの一体性を取り戻すためのものとして正当化されている。もし彼が実際にこの歴史的一体性を信じそれを回復しようとしているのだとすれば、それはまさにプラトンの『饗宴』においてアリストファネスが語ったこと——これはまた精神分析のエロス論の参照項となっている——と同じ意味で、高度にエロス化されている。書簡の中でフロイトは戦争を止める手段として「私たちの内なるエロスに訴えかける」（GW16:23）という、いささか安直とも思える解決策を提示しているが、タナトスと同じくあらゆるエロスの欲動もまた破壊欲動と混合された状態でしか発現しないのであるから、こういった考え方はあまりに不用心であろう。

- * 11 この点についてはジャック・デリダが『絵葉書』所収の「思弁する——フロイトについて」で精密に議論している。工藤 [2020] を参照のこと。

引用文献

- Sigmund Freud *Gesammelte Werke* からの引用はGWの略号の次に巻数、コロンを挟んで頁数という形で表記した。またラカンの *Écrits* からの引用は'E' *Autres écrits* からの引用はAEの略号で示した。
- BENHEÏM, David, « Freud et la question de la guerre », *Topique*, n° 99, Bordaex : L'Esprit du Temps, 2007, p. 177-183.
- FREUD, Sigmund, *Die Traumdeutung*, in *Gesammelte Werke Band II/III*, Frankfurt am Main: Fischer Verlag, (新宮一成訳「夢解釈」『フロイト全集』第四／五巻、東京：岩波書店、二〇〇七／二〇一一年)
- » Trieb und Triebsschicksale « in *Gesammelte Werke Band X*, S. 210-232. (新宮一成訳「欲動と欲動運命」『フロイト全集』第一四巻、二〇一〇年、一六七—一九三頁)
- » Zeitgemäßes über Krieg und Tod « in *Gesammelte Werke Band X*, S. 324-355. (田村公江訳「戦争と死に關するの時評」『フロイト全集』第一四巻、二〇一〇年、一三三—一六六頁)
- » Vergänglichkeit « in *Gesammelte Werke Band X*, S. 358-361. (本間直樹訳「無常」『フロイト全集』第一四巻、二〇一〇年、三二九—三三三頁)
- » Trauer und Melancholie « in *Gesammelte Werke Band X*, S. 427-446. (新宮一成訳「喪とメランコリー」『フロイト全集』第一四巻、二〇一〇年、二七三—二九三頁)
- *Jeune des Lustrprinzips*, in *Gesammelte Werke Band XIII*, S. 1-69. (総田純次訳「快原理の彼岸」『フロイト全集』第一七巻、二〇〇六年、五三—一二五頁)
- *Das Ich und das Es* in *Gesammelte Werke Band XIII*, S. 235-289. (道旗泰三訳「自我とエス」『フロイト全集』第一八巻、二〇〇七年、一—六二頁)
- » Warum Krieg ? « in *Gesammelte Werke Band XVI*, S. 11-27. (高田珠樹訳「戦争はなぜに」『フロイト全集』第二〇巻、二〇一一年、二五七—二七三頁)
- » Entwurf einer Psychologie «, in *Gesammelte Werke Nachtragsband*, S. 387-480. (総田純次訳「心理学草案」『フロイト全集』第三巻、二〇一〇年、一—一〇五頁)
- » Brief an Frederik van Eeden «, in *Gesammelte Werke Nachtragsband*, S. 697-698. (道旗泰三訳「フレデリック・ヴァン・エーデン宛書簡」『フロイト全集』第一三巻、二〇一〇年、三二七—三二八頁)
- LACAN, Jacques, « Situation de la psychanalyse et formation du psychanalyste en 1956 », in *Écrits*, Paris : Édition du Seuil, 1966, p. 459-491.
- » Proposition du 9 octobre 1967 sur le psychanalyste de l'École « in *Autres écrits*, Paris : Éditions du Seuil, 2001, p. 243-259.
- ソニア・キリアコ『稲妻に打たれた欲望——精神分析によるトラウマからの脱出』向井雅明監訳、東京：誠信書房、二〇一六年。
- 片岡一竹「道徳の起源についてフロイトは何を語ったか——超自我における欲動、対象、寄る辺なき」『哲学の門——大学院生研究論集』第三号、東京：日本哲学会、二〇二一年、五六

一六九頁。

工藤頭太「脱構築と精神分析——ジャック・デリダにおける死の欲動の問い」、『I. R. S. ジャック・ラカン研究』第一四号、

東京・日本ラカン協会、二〇二〇年、一四四―一六五頁。

総田純次『精神病理学の認識論的基礎——解釈学的立場からのアプローチ』京都・晃洋書房、二〇〇三年。

片岡一竹（かたおか いちたけ）

一九九四年栃木県生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程。戸山フロイト研究会主宰。東京精神分析サークル会員。日本ラカン協会会員。

著訳書に『疾風怒濤精神分析入門——ジャック・ラカンの生き方のススメ』（誠信書房、二〇一七年）、ソニア・キリアコ

『稲妻に打たれた欲望——精神分析によるトラウマからの脱出』（共訳）（誠信書房、二〇一六年）がある。

15分で読む いま読み返すフロイトの戦争論 ブックガイド

フロイトの著作

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
講談社学術文庫	4062923682	ひとはなぜ戦争をするのか	A. アインシュタイン／S. フロイト著、浅見昇吾訳	600	2016
岩波書店	4000926744	「戦争と死についての時評」『フロイト全集』第14巻	田村公江訳	品切れ	2010
岩波書店	4000926744	「無常」『フロイト全集』第14巻	中間直樹訳	品切れ	2010
岩波書店	4000926775	『快原理の彼岸』『フロイト全集』第17巻	総田純次訳	品切れ	2006
岩波書店	4000926775	『集団心理学と自我分析』『フロイト全集』第17巻	藤野寛訳	品切れ	2006
岩波書店	4000926805	『文化の中の居心地悪さ』『フロイト全集』第20巻	嶺秀樹・高田珠樹訳	品切れ	2011
講談社学術文庫	4062924603	メタサイコロジー論	十川幸司訳	880	2018
日本教文社	4531081387	フロイト最後の日記 1929-1939	ロンドン・フロイト記念館編、小林司訳	11429	2004

その他の著作

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
誠信書房	4414414653	稲妻に打たれた欲望——精神分析によるトラウマからの脱出	ソニア・キリアコ著、向井雅明監訳	2700	2016
みすず書房	4622077961	フロイトの脱出	デヴィッド・コーエン著、高砂美樹訳	4800	2014
岩波書店	4000611299	精神分析のとまどい——至高の残酷さの彼方の不可能なもの	ジャック・デリダ著、西宮かおり訳	2200	2016
講談社学術文庫	4061590922	群集心理	ギュスターヴ・ル・ボン著、桜井成夫訳	1020	1993
みすず書房	4622006015	夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録	ヴィクトール E. フランクル著、霜山徳爾訳	1800	1985
みすず書房	4622039709	新版 夜と霧	ヴィクトール E. フランクル著、池田香代子訳	1500	2002
春秋社	4393363607	それでも人生にイエスと言う	ヴィクトール E. フランクル著、山田邦男・松田美佳訳	1700	1993

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
東京創元社	4488006518	自由からの逃走	エーリッヒ・フロム著、日高六郎訳	1700	1951
みすず書房	4622086253	新版 全体主義の起源1 反ユダヤ主義	ハンナ・アーレント著、大久保和郎訳	4500	2017
みすず書房	4622086260	新版 全体主義の起源2 帝国主義	ハンナ・アーレント著、大島通義・大島かおり訳	4800	2017
みすず書房	4622086277	新版 全体主義の起源3 全体主義	ハンナ・アーレント著、大久保和郎・大島かおり訳	4800	2017
みすず書房	4622086284	新版 エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告	ハンナ・アーレント著、大久保和郎訳	4400	2017
ちくま学芸文庫	4480088598	戦争における「人殺し」の心理学	デーヴ・グロスマン著、安原和見訳	1500	2004
岩波書店	4000024280	ラカニアン・レフト——ラカン派精神分析と政治理論	ヤニス・スタヴラカキス著、山本圭・松本卓也訳	品切れ	2017
Flammarion	2082125161	«Spéculer - sur «Freud»», in <i>La carte postale : de Socrate à Freud et au-delà</i>	Jacques Derrida	35 €	1980
Presses Universitaires de Paris	2130582786	<i>La Mort donnée : Essai de psychanalyse sur le meurtre et la guerre</i>	Sophie de Mijolla-Mellor	26.50 €	2011

日中国交正常化50周年と東方書店

田原 陽介（東方書店）

中国関係専門書店「東方書店」店長の田原と申します。

この度、今年は日中国交正常化50周年ということで、中国関係専門書店の売場から見た日中関係について、という原稿執筆のご依頼を頂きました。

私の書店人生は天安門事件に始まります。当時私は北京に留学中でしたが、そのさなかの1989年に第二次天安門事件が起きました。そのため学業を続けることができなくなり、帰国して東方書店に就職することになりました。従いまして、この原稿の始まりは1989年からということになります。一口に日中関係と申ししましても多岐にわたり、私は日記をつける習慣もないので忘れていることも多く、また期待されているほどの劇的なことはなかったことを最初にお断りしておきます。

1989年6月4日日曜日に起こった第二次天安門事件。「血の日曜日」とも呼ばれたこの事件は世界に大きな衝撃を与えました。日本の出版界に与えた影響も大きく、関連書の出版が相次



東方書店外観

ぎました。当然当店のお客様の関心も高く、関連書籍は飛ぶように売れました。民主化を求めた学生運動を中国政府が弾圧した事件でしたので、中国政府に対して批判が吹き荒れました。それまで「中国覇貢」だったお客様に、「東方さん、もう僕は今回のことで中国のことを嫌いになったよ」と店頭で言われたこともあります。また、ある中国人のお客様と話をした時、そのお客様は、人民解放軍という「人民のための軍隊」が人民に、それも学生に銃口を向けたことに対してショックを受け、涙を流されていました。このことを思い出すと、いまだに胸が詰まります。

そのあと中国から入荷した各種団体名簿では、天安門事件で失脚した趙紫陽氏の名前の上に乗べて紙が貼られて消されていたことを思い出します。けれども、この事件の影響で来店者数や売上が減少したかと言うとそういうこともなく、中国の経済発展に伴い中国との往来も増えたため、中国語学習書、経済関連書もよく売れました。

90年代には第二次投資ブームが起り、中国との合弁企業設立のための法律の本や、現地に駐在する社員のための資料などを買い求めるビジネスマンが多く見られるようになりました。上海に事務所を開くので、「上海」と名の付く本を全部買います、という豪勢

な買い方をされたお客様もいらっしゃいました。

その後、90年代後半からは両国の歴史認識問題による衝突が散発的に起こり、日中関係は良くなったり悪くなったりを繰り返します。試しにこの文章を書くために年表をつくってみましたが、どちらかと言うと悪いほうが多かった印象です。

特に日中関係がことさら冷え込んだのは2010年尖閣諸島中国漁船衝突事件、2012年尖閣諸島国有化以降の数年間でした。

その「反日」「嫌中」の当時、店頭でどんなことがあったかと言うと、幸いなことに特にトラブルというのはなかったように思います。例えば中国嫌いのお客様からお叱りを受けることもありませんでした。しかし、この数年はここまで日中関係が悪くなったことは戦後なかったと思います。この数年間は大学の中国語履修者が減少したと聞いていますし、実際、店の中国語テキストの売上も落ちた記憶があります。多くの日本人が中国のことを嫌いになって興味がなくなり、中国関連の書籍を読まなくなるのではないかと、東方書店は今後どうなるのだろう、と思いました。

そんな中、店頭では中国人のお客様の来店が目立つようになります。よく売れたのは中国古代史関係の学術書でした。北京大学をはじめ、中国の有名大学の研究者が来店し、学術書をこぞって「まとめ買い」されていきました。そのことは、日本の中国史研究は長い歴史がありレベルも高い証拠だと、誇らしく思っています。そして、学術書を販売することで当店も微力ながら学術

交流に貢献しているのかな、とも思いました。

学術ということであれば、中国製のアプリでWeChatやLINEのようなものがあり、それを使って中国の学会やシンポジウムの動向を知ることができるのですが、それを見ると、中国の学会プログラムに日本人研究者の名前も散見され、政治の世界では「反日」「嫌中」いろいろなあっても、学術交流は続いていることがわかりました。また、そのWeChatに当店の正面売り場の平積の写真をアップすると反応がよく、中国からの購入方法のお問い合わせもよく頂きました。

その後、2015年ぐらいから一般の中国人観光客の日本旅行が増え始めます。当店にも中



東方書店店内

国人観光客が来店され、大陸では購入できない香港や台湾出版のいわゆる「暴露本」など政治関連書や発禁小説をご購入されていました。世間では中国人客のドラッグストアでの紙おむつ等のまとめ買いが話題になっていた頃です。当時は当店でも中国人の書籍購入というインバウンド需要があったわけです。

そして、ここ数年中華コンテンツの隆盛が目立つようになりました。中華コンテンツと言えば、以前は中国を理解するために接していたという傾向が強かったように思いますが、今は純粋にコンテンツが面白いからそれを楽しむという時代に入ってきたようです。

皆さんもご存知のSF小説『三体』は全世界で2900万部、日本でも37万部とか47万部とか言われていますが、まあ大変なベストセラーとなりました。その他でも『13・67』をはじめとする華文ミステリ、『羅小黑戦記』などのアニメ、『魔道祖師』などBL小説が当店でも大変な人気です。これは中国のものだから、ではなくて純粋にコンテンツが面白いから売れているのだと思います。だから、そこを窓口にして中国という国に興味を持つかという、必ずしもそうではない。例えば「スターウォーズ」が好きだから、アメリカという国に興味を持つかという、そうとは限らないというのと同じです。これは近年の新しい傾向ではないでしょうか。『三国志』『西遊記』等の古典文学は昔から日本人を魅了していましたが、ここまで一般の若い人たちを熱狂させるようなものは他にあまり記憶にありません。当社としても注視している現象であります。中国専門書店としては、これを単なるブームに終わらせず、一般の人の中国文化や学術への興味につなげていきたいと考えています。

最後になりますが、この文章のテーマである書店の売場から見た日中関係とは、とりもなおさず、店頭でのお客様とのやり取りから見た人と人との日中関係、ということだと思えます。例えば、お客さまに「中国人との付き合いかた」についての本はあるか、と訊かれてそれについて書かれている本を紹介する。そして、そのお客様が中国のなにかしらとつながる。そこで小さな日

中関係ができる。こうして中国について理解をする手助けをするということが当店の役割だと思っています。

新型コロナウイルスが猛威を振るっているこの2年間は来店者数も減り、店頭でのお客様との直接のやり取りは減りましたが、当店の「Twitter」等のSNS上で積極的に行っています。書店のSNSというところ、通常は新刊の入荷情報や販促がメインになりますが、当店では「中国に興味のある人」に広く楽しんでもいただけるような情報も発信するようにしています。「中国に興味のある人」がお互いにつながれる、いわゆるサロンのようなものになれば良いな、と思っています。SNSでは中国からも「いいね」や「ご意見」をもらうことがあり、ここでも日中関係が生まれています。こうした一般の人と人とのつながりを、本を介して育んでいくことが、新しい形の「草の根交流」なのではないかと思っています。これこそが当店が創業当時から大切にしていることなのです。

日中関係は今後もいろいろなことが起こるでしょう。

当店はこれからも変わることなく、「正しい理解」を通じての「草の根の日中交流」の一助を担っていききたいと考えています。

田原陽介（たはら ようすけ）



著者近影

図書館をもっと楽しく……カーリル

図書館蔵書検索サイト「カーリル」(<https://cali.jp/>)は、2010年3月にサービスを開始した。今からおおよそ12年前になる。当時の私は、27歳でフリーのソフトウェアエンジニアとしてウェブサービスの立ち上げや、企業向けのコンサルティングなどを手掛ける傍ら、地元で何かできることはないかと市役所のシステム構築などに関わったりもしていた。

カーリルのアイデア

カーリルの開発を始めたのは、あるウェブベンチャーの新規事業を考える会議（ブレインストーミング）で図書館に関するウェブサービスのアイデアが出たのがきっかけ

吉本 龍司（株式会社カーリル 代表取締役・エンジニア）

だ。この会議は2009年12月に行われ、開発期間はおおよそ3か月だった。「楽しい蔵書検索」と「図書館利用のきつかけとなること」を目標として、各図書館がバラバラに整備した蔵書検索システムの情報を統合的に検索できる仕組みを整備しようということになった。Amazonなどのオンライン書店の情報と、図書館のリアルタイムの貸出状況を組み合わせることで、図書館の利用とネット書店での購入をシームレスにつないだ。

サービスの公開初日から「全国の図書館の本が探せること」を目指し、スタート時には4300館の図書館や公民館図書室の本が探せるようになった。現在では、大学図書館や専門図書館なども含めてさらに幅広い図書館に対応しており、7400館以上の図書館と連携し



図1 カーリルのトップページ

ている(図1)。

私はこのプロジェクトで、「全国の図書館からデータを収集する仕組み」の構築を担当した。低コストで大量のデータを処理するために、技術的にも野心的な設計《アーキテクチャ》を導入したが話が長くなるのでここでは割愛しよう。とはいえ基本はただの人海戦術であり、ひたすらにプログラムを書き続け、そしてデータを整備した。あとから思い返せば、たまたまそのとき時間があつたので、とても面倒で誰も作らなかったものを、寝る時間を削ってついつい作ってしまったという感じだ。

サービス開始後の反響

公開直後から、想定していたよりも遥かに大きな反響があつた。あくまで実験的なプロジェクトで、ウェブメディアにプレスリリースを送った程度だったが、Twitterやはてなブックマークなどでも多くのコメントが寄せられた。その中で「図書館に新しい本があることを初めて知った」とか「初めて図書館のカードを作った」というような感想が記憶に残っている。



図2 カーリルの検索結果

サービスが公開されると、私はさらに忙しくなった。何しろこれまで図書館とはまったく接点のなかったウェブサービスの会社が、突然に全国の図書館と連携した蔵書検索サービスを始めたのだ(図2)。検索しているのは公開情報なのだから、事前の合意などない。図書館員からは業務でも有効活用していますといった好意的なメッセージも多かったが、電話越しに「うちの本が検索できるのは困る、利用者が増えても対応できない」と怒られることもあった。全国の図書館が公開した蔵書情報《Web-OPAC》にアクセスして情報を取得しているため、多くの図書館がカーリルからのアクセスを拒否するようになるとサービスが成立しない。だから最初に取り組んだのは社会的合意を得るといふ、ふわとした仕事だった。具体的には、南に図書館員の集まりがあると聞けば飛んでいき、北に講演会があると聞けば飛んでいき、とにかく懇親会で名刺とカーリルのパンフレットを配ることから始まった。

さらに「全国の図書館からデータを収集する仕組み」を、無償で公開することにした。これをAPIと言うが、カーリルそのものもAPIの利用例のひとつとし

て位置づけ、だれでも図書館のデータを活用した新しいサービスを開発できるようにした。データを独占しないことが、合意形成に不可欠であり、だれでも使えるようにしておくことが何より「図書館的」だと考えたからだ。今日、スマートフォンのアプリストアでは図書館の蔵書検索と連携するアプリがたくさん公開されているが、そのほとんどがカーリルのAPIを活用している。開発しているのは、企業や個人などさまざまである。

ちょうどこの頃「岡崎市立中央図書館事件」が起きた。この事件は、岡崎市立中央図書館の蔵書検索システムにアクセス障害が発生し、利用者が逮捕された事件である。根本的な原因は図書館側のシステムの不具合であったが、利用者がプログラムを使って機械的にアクセスしていたことから、そんなことをするのは普通じゃないからサイバー攻撃だ、という話になり偽計業務妨害の容疑で逮捕された。

当時、図書館が運用していたウェブサービスの品質は低く、システム障害や個人情報漏洩も日常茶飯事だった。だからカーリルを安定的に成長させるためには、図書館全体のセキュリティやシステムの性能も向上させる

必要があった。さらに検索の基礎となる本の情報《書誌データ》はAmazonに依存していた。このことは、ユーザーにとって高い利便性をもたらしたが、一方で制約でもあった。収入の大部分もAmazonに依存しており、ビジネスモデルとしても脆弱だ。何より「図書館の本をあたりまえにちゃんと検索できるようにする」というだけでも、90パーセントまではうまくいっているように見えるが、残りの10パーセントのために取り組まなければならない課題がたくさんあった。

あたらしい「かいしゃ」をつくる

サービス開始から2年が経った2012年。ユーザー数は順調に増加していったが、広告収入のみによる収益化は難しいこともわかってきた。投資家からの出資を受けて事業に取り組むウェブベンチャーとして採算性のないサービスに継続的に投資することはできなくなってくる。だんだんカーリルの延長として新しいことに取り組むのが難しくなってきた。

そこで、開発や運営に関わっていたメンバーが出資し

て、カーリルの運営を引き継ぐ新会社を立ち上げることにした。そこではいくつかの前提条件を決めた。まず、システム開発会社やウェブサービス会社ではなく、図書館サービスを提供する会社だということ。そして、広告収入を数パーセント増やそうといった収益化は優先しない。今あるサービスを安定的に提供しながら、10年、20年先を見据えた長期的な課題解決に取り組んでいこうということだった。

カーリルが掲げる「図書館をもっと楽しく。」というミッションの主語には、ユーザーも図書館員も、そして当然、私たちカーリルのメンバーも含まれている。綺麗ごとばかりも言ってはられないが、極端に言えばメンバーがだれもやりたくないことはやらないし、だれかがやりたければ止めない、ということにした。さらに、時間を売る「受託開発」だけは絶対にしないと決めた。私たちは私たちがやりたいことをするために、そして自分たちがすべきだと思ふことをするためにこの会社をつくるのだ。こうして、カーリルは、会社のあり方や自分たちの働き方を実験する遊び場となった。

事業の継続性

新しい会社は、初年度からもちろん赤字だった。そんな会社が今年10年目の決算を迎えることができたのは、虚勢を張ってまで生き残ることは執着しなかったからだと思う。会社を設立した直後、多くのベンチャーキャピタルが訪ねてきた。しかし、「私たちに事業計画はないし、差し当たったの収益性もない。しかし、取り組むべき課題は山積でその分析はできている。とても面白いテーマなので、20年以上先、いや100年先に投資してほしい」という話をする、みんな帰ってしまっただ。あるいは、その技術を別の業界に応用すればこんなに収益化できますとプレゼンもされた。でも、私たちはまさにそういうことに時間を取れないためにこの会社を作ったのだった。

私たちが目指したのは、ただカーリルというウェブサービスを継続することではなく、自律・分散・協調して動く日本の図書館システム（いわゆる情報システムだけではなく相互貸借などの制度設計や、図書館の連携、働く人や利用

者との関係性、出版活動との関わり）や自分たちの情報アクセス、そして情報発信との循環をもっと楽しくしていこうということだった。だから、私の仕事の中心は、仕組みを設計することだ。

ゆるくつながる、かるいしくみ。

自由を追い求めてきた。しかし、自由だと思っていたインターネットの世界は、実際はそうでもないことにも気付いている。だから、全国の図書館に掲げられている「図書館の自由に関する宣言」は、私も含めてITを生涯に生きている人々に響く(図3)。

自律・分散・協調とは、インターネットの基本的な仕組みを説明するときによく使われる言葉で、「自律」したネットワーク同士がお互いにつながってインターネットを構成するという考え方である。自律したものの同士がつながるためには、たえず話し合いながらルールを調整しなければならない。

しかしネットワークへの参加者が増えて社会がインターネットに強く依存するようになると、インター

ネットも中央集権的な仕組みのほうが効率的だと考えられるようになっていった。もはや自律することを放棄して、その制御を一部の事業者任せ始めたのである。そしてITの世界(電子書籍でも同じかもしれないが)にはプラットフォームなるものが独立して存在しており、プラットフォーム同士はつながらないのだと説明されるようになった。

私を感じる、カーリルの技術的な面白さ(モチベーション)はまさにここにある。つまり、形式的かもしれない

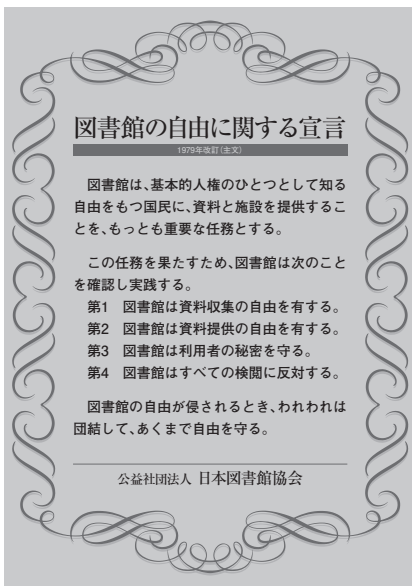


図3 図書館の自由に関する宣言

が図書館がまだ独立を保っているということだ。自分とは異なる思想の本を所蔵することはいかなものか、と図書館に見解する人もいるだろう。カーリルによって全国の所蔵情報が一瞬で可視化できるので、こういう活動はいっそう効率化された。人それぞれに正義があるのでこうした活動の是非はここでは問わない。少なくとも判断は多くの図書館に分散されることになる。批判が出ればAmazonやGoogleから削除されて検索できなくなってしまうインターネットの世界よりよっぽど自律的で民主的ではないか――。

インフラの費用負担

2016年、図書館業務向けのAPI提供（検索技術の外部提供）を始めた。当時、カーリルが提供するAPIを含めたサービスのほとんどが無料で提供されていたが、図書館業務での活用はあまり進んでいなかった。信頼されていなかったということもあるが、無料であることは不安だという声も多かった。一方で、実際の現場《とくに他の図書館から本を取り寄せる相互貸借業務など》で

は、こっそりカーリルを活用しているよ、という声も寄せられていた。多くの県立図書館が県内の横断検索サービスに多額の費用をかけて構築しているにもかかわらず、検索に時間がかかりすぎて正常に動いていないケースさえあった。カーリルで検索してユーザーが取り寄せを依頼しても、そのバックエンドの業務が非効率で、図書館が相互貸借を面倒がることさえ起きていたのだ。

このような問題を解決するために、社内では「図書館員のためのカーリル」に関するアイデアを積み重ねていった。もちろん、図書館員からは多くの要望も寄せられていたのでそれも参考にした。そのアイデアに最初に賛同してくれたのは、京都府立図書館だ。つまり、カーリルがカーリルのために運用している検索技術を図書館の業務に組み込んでみようという話だ。そのためにいろいろな制約をクリアする必要があったし、ベースとなる汎用的な検索画面のプログラムをオープンソースとして公開したりもした。

結果としてはこのアプローチは、ゆっくりではあるが着実に広がっている。

例えば、富山県砺波市の図書館が提供する「となみっ



図4 「となみっけ!」(砺波市立図書館)

け!」は、自館の蔵書だけではなく近隣6県のすべての図書館《東海・北陸地域の相互貸借ネットワークにより500館以上から取り寄せができる》の本を探すことができ、そのまま依頼票を印刷できる(図4)。福島県白河市の「りぶらんサーチ」は、近刊情報《発売予定の本》も検索結果に表示され、そのままリクエストできるようになった。

これらのサービスは、図書館が主体的に企画し、元のシステム会社なども協力しながら実現されている。カーリルの仕事は、本の情報をつながりやすく整理しながら、検索サービスのインフラを安定的に維持することだ。これは、もともとカーリルというウェブサービスを提供するために日々やっていることで図書館のために特別に何かをしているわけではない。カーリルのインフラに価値を見いだし、費用負担する図書館が増えたことはありがたいことである。

ここで「費用負担」という言葉を使ったが、個人的に最近のカーリルの展開の中で気に入って使っている言葉だ。とても楽観的な考えで、サービスや技術が本当に必要とされるのならば、きっとだれかが費用を負担するだ

茨城県横断検索デモサイト

タイトル

著者名

出版者

出版年 年から 年まで ISBN

フリーワードに属する

11件見つかりました。取手市は検索できませんでした。

地域で絞り込み	タイトル	著者名	出版者	出版年	ISBN	▼ 所蔵館
すべて	村上海城の娘 下巻	和田 竜ノ音	新潮社	2013/10/20	4103068833	✕
県立図書館						40館所蔵
県央地域						茨城県立図書館
県北地域						ひたちなか市
県南地域						小美玉市
県西地域						水戸市
農行地域						茨城県
外部サイト						城里町
NDLサーチ						東海村
CINii Books						笠間市
						那珂市
						北茨城市
						常陸大宮市
						日立市
						大子町
						常陸太田市
						高萩市
						かすみがうら市
						つくば市
						守谷市
						鉾田市
						阿見町
						石岡市
						つくばみらい市
						利根町
						土浦市
						牛久市
						美浦村
						龍ヶ崎市
						船城市
						八千代町
						坂東市
						筑西市
						下妻市
						古河市
						常総市
						桜川市
						潮来市
						行方市
						神栖市
						前橋市
						鉾田市
						村上海城の娘 上巻
						和田 竜ノ音
						新潮社
						2013/10/20
						4103068825
						39

Powered by Calil

図5 茨城県のトライアル (<https://try.calil.jp/ibaraki/>)

ろうという自信と期待だ。さらに言えば、負担する人がいないのなら、自分で払えばいいさ、とまで考えている。少し前に「フリーミアム」という言葉も流行ったが、それとも少し違う気がする。日本の人口や、図書館の予算、あるいは出版業界の売上といったものはや青天井に伸びていくというようなものではない。私たちは収縮する社会に生きている。そんな中で質を下げず、いやもっとと発展していきたいと考えているのであれば、少なくともクリエイティブな職業につく人々は未来のない《くだらない》ビジネスモデルを考えるより、着実にやるべきことがたくさんあるのではないか。嘆いている時間はもったいないようにも思うのだ。

いろいろな難しさはあるが、基本的には費用を負担することと使えることが一致する必要はない。負担しただけかっこいいという程度でいいのだ。実際に「図書館員のためのカーリル」は、全国の図書館にトライアルと称して提供されている(図5)。たまたま知っている人だけではあるが、こっそりと使えるようになっていた。カーリルの隠れた人気サービスとなった。

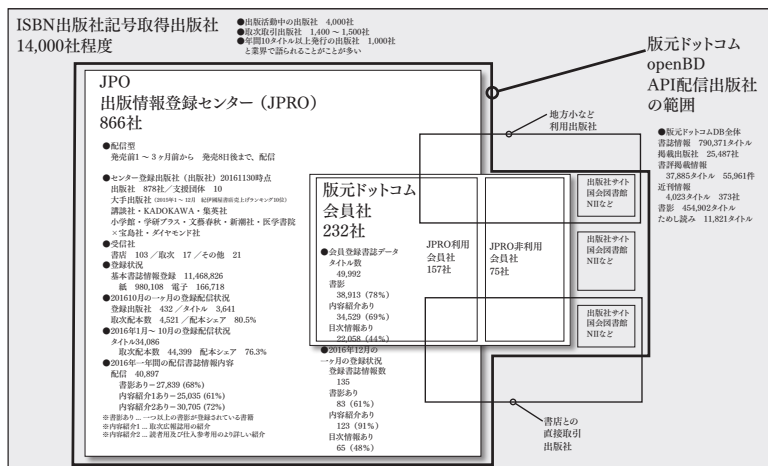


図6 openBDで配信する出版社 (サービス開始時の資料から)

情報の流れをたくさんつくる

企業が製品やサービスを提供しようというとき、ユーザーをどうやって「ロククイン(囲い込み)」するかといった言葉が聞こえてくる。カーリルの取り組みの多くは、それらを明確に否定して解放することを志向する。

2017年に開始した「openBDプロジェクト」は、本の情報(書誌情報)や書影を、だれでも自由に使える、高速なAPIとして提供する取り組みだ(図6)。出版社で構成される業界団体の版元ドットコムとカーリルが共同で運営している。このAPIはだれでも無料で使うことができるが、運営にかかる費用は版元ドットコムとカーリルが負担している。

最近では書評サイトや、出版社、書店、図書館などでも幅広く活用されるようになってきた。もちろんカーリルも利用者のひとつである。その本があることがわからなければ、店に置けないし、読者は購入することもできない。図書館で購入するかどうかの判断もできない。従来、ネット書店は豊富なデータを出版社から提供されて

おり、実質的にネット書店のデータを再利用（コピー）することも多かった。

もちろん、従来の出版エコシステムの中では、流通ルートそれぞれに最適化された情報の流れがあり、それは機能している。しかし、どこかが機能不全を起せばたちまち情報が入手できなくなってしまう。ひとりひとりの自由を担保するためには、たくさんの方の情報の流れをつくること、多くの選択肢があることが、とても重要だと思うのだ。

学校図書館支援プログラム

カーリルがコロナ禍で始めた取り組みのひとつに、「学校図書館支援プログラム」がある。学校図書館などを対象にインターネットからの蔵書検索と、予約を受け付ける簡易的なシステムを無償で提供するものだ（図7）。2020年の新型コロナウイルスの感染拡大で、全国でほとんどの図書館が休館した。そんな中で、蔵書検索サービスがインターネットを通して提供されるニーズが高まっていた。カーリルではこの状況を受けて、迅速に

サービスを提供するために、どんなデータ形式であっても取り込める仕組みを作った。これにより、データの変換などを一切せずに検索サービスを運用できる。導入のハードルが下がったことで、各学校の判断で柔軟な運用ができるようになった。口コミで広がって、これまでに約1000校が導入している。

「学校図書館支援プログラム」という名前だが、対象は学校図書館に限っているわけではない。公立図書館や公民館の図書室など、どんな図書館であっても求めがあれば無償で提供している。蔵書情報を公開する図書館が増えたことで、結果的にはウェブサービスとしてのカーリルの検索対象を拡大することにつながっている。予算の問題などから蔵書検索サービスの提供を取りやめる図書館も出てきているが、そういう図書館には積極的に活用を提案していきたい。

暮らしの中で図書館を使う

繰り返しになるが、カーリルは、会社のあり方や自分たちの働き方を実験する遊び場である。メンバーは私の



図7 学校図書館支援プログラムのイメージ

住んでいる岐阜のほか、東京や京都などに分散しており、コロナ禍前からフルリモートワークだった。コロナ禍になると、対外的なものも含めすべての打ち合わせはオンラインに移行して、月に一回、岐阜に集まっていた開発合宿もなくなった。そんな中で、新しいものを持続的に生み出していく模索が続いている。

我が家に大きな変化もあった。娘が生まれたのだ。8か月になった娘が眠りについて、ようやくこの文章を書き始めている。慌ただしい日々で、読んでいない本が山積みになっているが、図書館との新しい関係性もできた。これまでなかなか行く機会がなかった近所の公民館図書室におはなし会や絵本を借りに行くようになったのだ。そんなわけで、12年目にして本格的な図書館デビューだ。メンバーひとりひとりがつくる、カーリルの取り組みは、こういう日々の暮らしの変化に応じて、また変化していく。それでいいのだ。

世界を読み解く一冊の本

「ある書物がよい書物であるか、そうでないかを判断するために、普通わたしたちがやっていることは誰でも類似している。じぶんが比較的得意な項目、じぶんが体験などを総合してよく考えたこと、あるいは切実に思い患っていること、などについて、その書物がどう書いているかを、拾って読んでみればよい。よい書物であれば、きっとそういうことについて、よい記述がしてあるから、だいたいその個処で、書物の全体を占ってもそれほど見当が外れることはない。

だが、じぶんの知識にも、体験にも、まったくかわりのない書物にゆきあたったときは、どう判断すればよいのだろうか。

それは、たぶん、書物にふくまれている世界によっ

上村 和馬（慶應義塾大学出版会）

てきめられる。優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。その世界は書き手のもっている世界の縮尺のようなものである。この縮尺には書き手が通り過ぎてきた〈山〉や〈谷〉や、宿泊した〈土地〉や、出遭った人や、思い患った痕跡などが、すべて豆粒のように小さくなって籠められている。どんな拡大鏡にかけても、この〈山〉や〈谷〉や〈土地〉や〈人〉は、眼に視えないかも知れない。そう、じじつそれは視えない。視えない世界が含まれているかどうかを、どうやって知ることができるのだろうか？^{*}

—— 吉本隆明「なにに向って読むのか」



編集者は原稿と向き合う。原稿やゲラと向き合うときは、言葉の連なりと向き合っているのです、そのテキストが何を問い、どう分析し、いかなる回答を導き出そうとしているのかに意識を集中させる。読者の意識に何を投擲するのか、書き手と侃侃諤諤やりとりする。

やがて、そのテキストの連なりに名を与える。

その一方で、どんな本文紙を使い、どのくらいの束幅や重さや手触りにして、装幀家にどんな意匠を施してもらい、いかなる顔を持たせるか、頭を悩ます。姿かたちが頭の中にはっきりと輪郭を描いて浮かび上がるころ、責了を迎え、ゲラを手放す。

印刷や製本のプロセスは赤子が産まれるのを待つ親の心境に近い。

そして、見本出来の日。はじめて出逢う本は、あきらかにゲラのときの言葉の連なりとは異なっている。ゲラと本とのあいだには、あきらかに深淵なる跳躍がある。そこにあるのは、質量と身体を持つ、本という命そのものだ。まっさらな見本は赤子さながら。読み尽くされ

た古本は年老いた老人さながら。ルリユールを本のお医者さんと呼んだりするが、本という存在に命を感じるからだろう。矯めつ眇めつ、命を感じるこの本は、この先、どんな読み手と出逢って、どんなふうに使われ、育っていくのか。夢想したりする。

そのように本を造り、わが子を送り出すように、世に送り出すことを幾度も重ねていくと、ふと、本って一体何なのだろうと素朴な疑問が湧いてくる。

書物論を紐解けば、曰く、記憶装置の成れの果てだ、曰く、思想と情報を運ぶ器だ、それはそうだろう。頭では理解できるが、すんなりと腑に落ちないところもある。そういえば、ボルヘスがこんなことを言っていた。

「そもそも書物とは何でしょうか？ 書物は、物理的なモノであふれた世界における、やはり物理的なモノです。生命なき記号の集合体なのです。ところがそこへ、まともな読み手が現われる。すると言葉たち——言葉たち自体は単なる記号ですから、むしろ、それら言葉の陰に潜んでいた詩——は息を吹き返して、われわれは世界の甦りに立ち会うことになるわけです*。」

なるほど。読者を得た本だけが本足りうる。本は読ま

れることではじめて本になる。

エーコはこんなことを言っている。

「本が読書の媒体として残ってゆくか、もしくは、本が印刷技術の発明以前においてさえ担っていた、そして担いつづけてきた役割を担う、本とは似て非なる何かが登場するか。物としての本のバリエーションは、機能の点でも、構造の点でも、五百年前となんら変わっていません。本は、スプーンやハンマー、鋏と同じようなものです。一度発明したら、それ以上うまく作りようがない。スプーンを今あるスプーンよりよいものにするなんて不可能でしよう*。」

読書の媒体としては究極の発明品で、これ以上のものなんてありえない、と。なるほど、それもよくわかる。本の機能としての側面はよくわかる。わかるけれども、やはり本とは何か、という問いに直接的に答えてはいない気がしているときに、冒頭に掲げた吉本隆明の一文に出逢った。

「優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。」

この一文が自分にとっては最も腑に落ちるものだった。



「世界を読み解く一冊の本」シリーズを立ち上げたのは、先に挙げたような意識が背景にあったことも一因だ。ボルヘスもエーコも真理を突いていそうだが、術学的で簡単に足元を掬われかねない。

「優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある」という吉本隆明の言葉が頭の中で甦っている頃、「書物は一つの宇宙である。世界は一冊の書物である」という一文に出逢った。これは、松田隆美先生が編まれた『世界を読み解く一冊の本』という論集の冒頭にある言葉で、その後、本シリーズのキーワードとなる一文だった。人類は、世界の真理を収めるような器としての書物を多数生み出し、時代や文化の違いを超えて脈々と読み継いできたが、そのような本の世界に耽溺して、一冊一冊を深く読み、味わい尽くす、そんなシリーズを造りたい。やがて、編集部内でシリーズ企画開発のチームが立ち上がり、松田先生にはシリーズ・アドバイザーに就いていただいた。

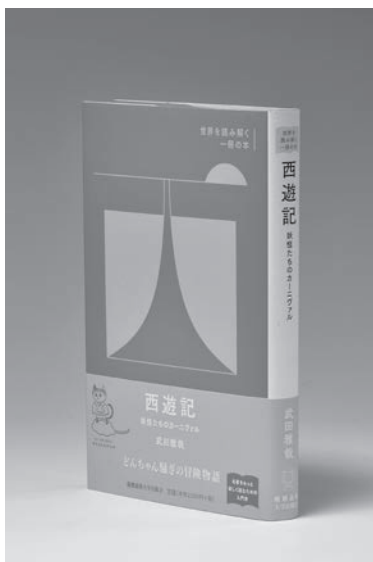
全十巻の選書にあたっては、本シリーズでは特に、



シリーズ「世界を読み解く一冊の本」全10巻

〈世界〉を規定し、人々の生き方を示す宗教書や、言葉を整理し〈世界〉の見方を示す辞典、〈世界〉を知の迷宮へと誘う奇書、〈世界〉を拡張させる巡礼の書、知へのアクセスを制限し〈世界〉を限定する焚書など、世界の名著のなかでも、とりわけ「本」について問題提起をする本」をテーマとした。〈世界〉という視角に徹底的に執着した。

そうして選ばれたのが、『旧約聖書』や『クルアーン』『空海』『三教指帰』、『百科全書』や『大槻文彦』『言海』、『西遊記』に『チヨウサー』『カンタベリー物語』、『ボルヘス』『伝奇集』、『エーコ』『薔薇の名前』、そして『オーウェル』『一九八四年』だ。これら古今東西の古典・新古典を、書物史、文学研究、思想史、文化史などの第一人者に、縦横無尽に読み解いてもらうこととした。その際、特に大事にしたのが、その作品世界と社会や人間に向けられた眼差しをわかりやすく解説するだけでなく、そもそもその書物がいかにして誕生し、読者の手に渡り、時代を超えて読み継がれていったのか、翻訳されて異文化にも受け入れられていったのかを書物文化史の視点から考えるという点だった。



『西遊記』



ボルヘス『伝奇集』

読者を得た本だけが本足りうる。
読書の媒体としては、書物は究極の発明品である。その点を重視したのは確かである。

書物の魅力を多角的に捉えることで、その書物がいかにして〈世界を読み解く一冊の本〉としての位置を文化のなかに与えられるに至ったのかを、書物を愛するすべての読者に向かって、深く丁寧に掘り下げることを大切にしたい。そのことを執筆者をお願いした。



装幀は、書籍・パンフレット・フライヤー・ポスター等の印刷物をはじめ、CI／VI制作（ロゴ、シンボルなど）を数多く手がけ、タイポグラフィや文字を軸にしたデザインワークを得意とするグラフィック・デザイナーの岡部正裕さんをお願いした。

岡部さんには、先述したようなコンセプトを伝え、書店店頭でのシリーズとしての展開やウェブ上でのアイキャッチなどについて特に重視したい旨、お伝えした。仕上がった装幀は、書名の一文字を大きくあしらひ、ビビッドな二色で彩ったデザインが本シリーズの代名詞

的な役割を果たすものになったと思う。

幾多の苦難を乗り越え、天竺への取経を目指す物語『西遊記』でいえば、実は「西」の文字に「道」のイメージが重ねられているし、虎や無限、円環や迷宮、永遠や夢といったテーマをめぐる探究を読者に誘いかける『伝奇集』では、「奇」の文字に虎のイメージを重ねるといった趣向を凝らしたデザインになっている。

一冊単体でもビビッドな装幀に目を引かれるが、全十巻の面陳は圧巻である。ぜひ、書店店頭で手に取っていただきたいが、本シリーズのデザイン・コンセプトに



せかよむ★キャット

あたまの模様は世界地図。

好奇心にみちあふれたキラめく瞳で
今日も古今東西の本をよみあさる！

ついでに、岡部正裕さんへのインタビュー動画を弊社note記事^{*4}に掲載しているので、ぜひそちらもご覧いただきたい。

デザイナーの中尾悠さんにデザインしていただいた「せかよむ★キャット」もお気に入り。シリーズの案内役で、古今東西の本をよみあさる愛書猫だ。帯やしおりや著者紹介欄に気まぐれに登場し、読書の森へ私たちを誘う。



このように造りはじめたシリーズは先頃、『空海』三教指帰』『オーウェル』一九八四年』の同時刊行をもって、ようやく完結を迎えた。企画当初のコンセプトがきちんと反映されているかどうかは読者の判断に委ねたい。

だが、本シリーズで取り上げた原書の一冊一冊に、あるいは本シリーズの一冊一冊にも、「小さな世界」があることだけは確かだ。「小さな世界」とは何か。実は、冒頭に掲げた吉本隆明の文章には続きがある。少し長くなるがそれを引用して、筆を擱きたい。

「もし、ひとつの書物を読んで、読み手を引きずり、また休ませ、立ちどまって空想させ、また考え込ませ、ようするにここは文字のひとつと続きのようにみえても、じつは広場みたいなところだな、と感じさせるものがあつたら、それは小さな世界だと考えてよいのではないか。

この小さな世界は、知識にも体験にも理念にもかかわりが無い。書き手がいく度も反復して立ちどまり、また戻り、また歩きだし、そして思い患つた場所なのだ。かれは、そういう小さな世界をつくり出すために、長い年月を棒にふつた。棒にふるだけの価値があるかどうかともわからずに、どうしようもなく棒にふつてしまった。そこには書き手以外の人の影も、隣人もいなかった。また、どういう道もついていなかった。行きつ戻りつしたために、そこだけが踏み固められて広場のようになつてしまった。

じつさいは広場というようなものではなく、ただの踏み溜りでしかないほど小さな場所、そこからさきに道がついてゐるわけでもない。たぶん、書き手ひとりがやつと腰を下ろせるくらいの小さな場所にしかす

ぎない。けれどそれは世界なのだ。そういう場所に行き当つた読み手は、ひとつひとつの言葉、何行かの文章にわからないところがあつても、書き手をつかまえたことになるのだ。」

注

* 1 吉本隆明「なにに向つて読むのか」『読書の方法——なにを、どう読むか』(光文社、二〇〇一年)一〇頁。

* 2 J・L・ボルヘス「1 詩という謎」『詩という仕事について』(鼓直訳、岩波文庫、二〇一一年)一〇頁。

* 3 ウンベルト・エーコ、ジャン・クロード・カリエール『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』(工藤妙子訳、C C メディアハウス、二〇一〇年)二四頁。

* 4 https://note.com/keioup/n/79c1762b749b?magazine_key=m4b3ffa13b12c

広報委員会

委員長 岩野忠昭

広報委員会の活動は、今期も前期と変わらず『人文会ニュース』の発行とウェブサイトの運営が二本柱になります。

ここ数年、『人文会ニュース』は年3回(8月、12月、4月)の発行をルーティンとしており、前期もこのスケジュールで発行しました。この数年の好評価を励みに、さらに充実した内容を揃えることを目指します。人文会の活動を広く知らせるという役割を基本に、書店や図書館の人文書担当の方に少しでも興味を持っていただき、なおかつ日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。

ウェブサイト(<http://www.jinbunkai.com/>)は、人文会と会員各社の情報提供の場としてさらに内容の充実を図ります。前期はウェブサイトで会員社の刊行物を適宜紹介するようにし、ウェブサイトに動きが加わりました。またさらにTwitter(@jinbunkai)も開設し、ウェブサイトの記事の更新をTwitterの投稿にも連動させるようにしました。

紙媒体とウェブ媒体というそれぞれの特性を活かし、かつ補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指しますので、今期もよろしくお願いいたします。

委員長 岩野忠昭(白水社)

三木 拓(法政大学出版局)

副委員長 乙子 智(慶應義塾大学出版会) 本橋弘行(ミネルヴァ書房)

調査・研修委員会

委員長 森 卓巳

今期の調査・研修委員会の活動の柱は「研修会の実施」と「グループ訪問先の選定」になります。コロナ禍の制約がある中で、前期は研修会の実施を中心に活動いたしました。

10月にはウェブサイト・リニューアルを行った勤草書房から、その経緯や改装以後の成果などを学びました。翌年2月には、丸善ジュンク堂書店と総勢57名でテーマごとに分かれてグループ討議を実施しました。コロナ禍で難しかった書店の方々とのコミュニケーションの場をつくり、今後の営業活動の参考になる事例となりました。また、4月には書店マスタを活用した筑摩書房の営業実例をご紹介いただき、共同受注サイト「Bookインタラクティブ」について学び、会員各社への有意義な情報公開の場を作りました。

これら3つの研修会は、いずれもオンラインでの開催でしたが、結果的に参加しやすいスタイルとなり、また参加者募集、研修後のアンケート実施とその共有など、オペレーションやノウハウも蓄積することができました。今期も会員社社員の知識や業務スキルの取得・向上のための研修会を計画的に実施します。

また、コロナ禍で2年間中止していた全国の書店・図書館・販売会社支社などへの訪問も、秋には再開する予定です。この訪問先を選定するのも小委員会の役割ですので、この間の市場の変化や動向を反映した訪問先を委員会内で熟議し提案します。

新型コロナウィルスの感染状況も徐々に落ち着く中で、会活動もゆっくりと戻りつつあります。この間の制限された中で培った経験や知見も加え、販売・企画委員会、広報委員会と連携し、会員社にとって有益な委員会活動になるよう努めます。今期もよろしくお願いいたします。

委員長 森 卓巳(青土社)

東原亮佑(勤草書房)

副委員長 澤畑 壘(東京大学出版会)

河内秀憲(筑摩書房)

萩原弘和(日本評論社)

委員会活動方針

販売・企画委員会

委員長 吉岡 聡

今期、販売・企画委員会は新たに委員を1名迎え、6名体制となりました。活動としては、前期までに引き続き、書店・販売会社・図書館関係等みなさまと連携・協働し、多様な読者と学術専門書の出会いの場をつくっていただけるよう委員一丸となって取り組んでまいります。

具体的には、書店様へ向け「人文書ベストセクション」、「今月の一押しFAX」、紙版「新刊案内パック」、製作5年目を迎え若干のリニューアルを図った「高校生のためのブックガイド」を通じて、時宜を得た情報発信をしております。

また全国各地での大きささまざまな規模とテーマでのブックフェアも、小会の書店訪問活動が復帰していくなかで開催の機会を増やしていけるかと思えます。前期より三省堂書店様とは大規模ブックフェアだけでなく、主要店内好立地での常設棚施策に取り組んでおり、今期も注力しております。紀伊國屋書店様とも新たな施策に取り組んでいくことを双方で確認しております。期初からのオンライン書店楽天ブックス様でのブックフェアも、2年連続開催の運びとなり、引き続き新たな販路獲得を模索してまいります。

学術専門書の販売環境は一層厳しさを増しています。販売・企画委員会は、読者みなさまの知的関心にお応えするべく、他の2委員会と協力し、それぞれの活動を展開してまいります。今期も1年間ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

委員長 吉岡 聡(春秋社)
副委員長 段塚省吾(紀伊國屋書店)

佐藤信治(大月書店)
福士篤太郎(晶文社)
郡司恵太(誠信書房)
登尾純一(平凡社)

☆4月例会

期日：2022/4/15 15:00～17:00

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換
4. 来会：株式会社大田丸東京事務所 上総暁所長
大田丸データ公開サービス(ODS)説明会

○人文会ニュースNo.140刊行

2022年4月発行

15分で読む：新城和博氏（沖縄〈復帰〉50年を考える、編集者）

書店現場から：木村晃氏（サンブックス浜田山）

図書館レポート：藤戸克己氏・花田吉隆氏（紀伊國屋書店）

編集者が語る：奥田のぞみ氏（サビエンティア・シリーズ、法政大学出版局）

●三省堂書店下北沢店 「新社会人・新生活に向けておすすめしたい教養書フェア」

2022/3/31～6/中旬

2. 各委員会活動報告
3. 三省堂書店施策
4. その他 情報交換

○調査・研修委員会主催研修会

「丸善ジュンク堂書店・人文会 合同研修会」

期日：2022/2/15 15:00～16:00 オンライン開催

参加者：丸善ジュンク堂書店28名、人文会28名（正担当18名プラス会員社から希望者10名）、
システム担当1名（日本評論社）

☆2月例会

期日：2022/2/18 15:00～16:35

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○人文図書目録刊行会臨時総会

期日：2022/2/18 16:35～17:05

場所：文化信用会議室

☆3月例会

期日：2022/3/18 15:00～17:00

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他

○調査・研修委員会主催研修会

「書店マスタで“できる”こと」

期日：2022/4/4 15:30～17:00 オンライン開催

講師：株式会社インテグテクノスフィア 田中明生氏

事例提供：筑摩書房 廣井一茂

参加者：45名（大学出版部協会会員含む）

●「高校生のためのブックガイド2022」発行 2022年4月発行 20,000部

担当：紀伊國屋書店（段塚）、大月書店（佐藤）

☆11月例会

期日：2021/11/19 14:00～15:35

場所：文化信用会議室

東京大学出版会代理参加(澤畑→角田)

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○人文図書目録刊行会総会

期日：2021/11/19 15:35～17:00

場所：文化信用会議室

○人文会ベストセクション108号「各社のロングセラー 5点」2021年11月発行

☆12月例会

期日：2021/12/17 15:00～17:30

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換
4. 来会(オンライン)：金高堂書店本店 刈谷睦美副店長
金高堂書店本店、朝倉ブックセンターでのフェア報告および質疑応答

○人文会ニュースNo.139刊行

2021年12月発行

15分で読む：中条省平氏(現代社会とマンガ、学習院大学教授)

書店現場から：安川康成氏(楽天グループ株式会社ブックス事業部)

図書館レポート：三崎絵美氏・信濃潔氏(明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館)

編集者が語る：吉澤麻衣子氏(シリーズ・ちくまQブックス、筑摩書房)

●三省堂書店神保町本店 人文書フェア 担当：販売・企画委員会 春秋社(吉岡)

期日：2021/11/9～2022/1/10 3,959冊 7,796,257円 昨年対比109%

☆1月例会

期日：2022/1/21 15:00～17:30

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事より

神保町本店／池袋本店／有楽町店／そごう千葉店／大宮店／成城店／札幌店／名古屋本店
〔全8店舗〕

2021年9月1日 開始（札幌店・名古屋本店を除く6店舗）～10月分より全8店舗開催
通年企画として現在も継続中

☆9月例会

期日：2021/9/17 15:00～17:00

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり
筑摩書房代理参加（廣井→河内）

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. 三省堂書店施策 各店担当者からの報告
4. その他
5. 来会（オンライン）：楽天グループ株式会社ブックス事業部 安川康成氏
6月開催「本気（マジ）で教養を身につける by人文会」フェア結果報告会

○調査・研修委員会主催研修会

「勁草書房ウェブサイト・リニューアル研修会」

期日：2021/10/12 15:00～16:30 オンライン開催

事例提供：勁草書房 東原亮佑

参加者：56名（大学出版部協会会員含む）

☆10月例会

期日：2021/10/15

場所：文化信用会議室 15:00～17:30 オンライン参加社あり

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○2021年人文会秋季研修旅行 中止

●金高堂書店 人文書フェア 担当：販売・企画委員会 平凡社（登尾）

期日：2021/9/18～2021/11/14

本店 741冊 1,209,334円 昨年対比95.1%

朝倉ブックセンター 353冊 564,460円 昨年対比82.4%

外商部 300冊 627,300円 昨年対比131.4%

●楽天ブックスフェア「本気(マジ)で教養を身につける by人文会」

担当：販売・企画委員会 平凡社(登尾)

期日：2021/6/1～2021/6/30 2,091冊 3,900,380円

☆7月例会

期日：2021/7/16 15:00～17:30

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

筑摩書房代理参加(廣井→藤井)

1. 代表幹事・幹事会より
2. 三省堂書店施策
3. 各委員会報告
4. その他

☆8月例会

期日：2021/8/20 14:00～17:00

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事・幹事会より
2. 三省堂書店施策
3. 各委員会報告
4. その他

○人文会ニュースNo.138刊行

2021年8月発行

代表幹事挨拶

15分で読む：松本卓也氏(ジャック・ラカン生誕120周年によせて、精神科医)

書店現場から：小林えみ氏(マルジナリア書店)

図書館レポート：小川直人氏(せんだいメディアテーク学芸員)

編集者が語る：楠本龍一氏(一冊の武器の向こうに(影響力の武器)、誠信書房)

総会報告、委員会活動方針など

○三省堂書店×人文会企画 担当者打合せ

期日：8月24日 15:00～16:00

オンライン開催

出席者：三省堂書店 副田執行役員、企画参加店舗店長および担当者

人文会 企画担当幹事 春秋社(吉岡)、青土社(森)および各店担当者計16名

●三省堂書店×人文会企画

「本の街 神田神保町発! 人文書 自信のオススメ」

エ) 各委員会の構成メンバーの選任 【別室】

* 選出された幹事(代表幹事、書記、会計と3委員長)により各員の希望も考慮し、委員会の構成メンバーを選考。

以下の人事を決定。

9 2021年度の役員および各委員会メンバーの発表

- ・代表幹事 片桐 幹夫(みすず書房)
- ・会計幹事 片山 伸治(吉川弘文館)
- ・書記幹事 水口 大介(創元社)
- ・販売・企画委員会 ◎吉岡 聡(春秋社) ○段塚 省吾(紀伊國屋書店)
佐藤 信治(大月書店)・福士 篤太郎(晶文社)・
登尾 純一(平凡社)
- ・調査・研修委員会 ◎森 卓巳(青土社) ○澤畑 壘(東京大学出版会)
東原 亮佑(勁草書房)・廣井 一茂(筑摩書房)・
荻原 弘和(日本評論社)
- ・広報委員会 ◎岩野 忠昭(白水社) ○乙子 智(慶應義塾大学出版会)
郡司 恵太(誠信書房)・三木 拓(法政大学出版局)・
本橋 弘行(ミネルヴァ書房)

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

10 三役と各委員長挨拶

11 退任者、新担当者挨拶

17:20 終了

☆6月例会

期日：2021/6/18 15:00～17:40

場所：文化信用会議室 オンライン参加社あり

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換
4. 来会：図書館流通センター仕入部部长 池田和弥氏、同仕入部 松村幹彦氏
「電子図書館LibrariE & TRC-DLについて」

○人文三目録発刊 担当：広報委員会・幹事会

2021-2022年版：2021年5月発行、10,000部(哲学思想)・7,500部(心理)・8,500部(社会)。
「哲学・思想図書総目録」は巻頭に重田園江氏「ポストモダンの後、それから…」、「社会
図書総目録」は巻頭に井筒節氏「国際社会が目指す『本当の』SDGs：『誰一人取り残さな
い』とは」をそれぞれ掲載。「心理図書総目録」は表紙をリニューアル。

○特約店グループ訪問 コロナウイルス感染拡大のため中止

2021年度(2021.5～2022.4)人文会活動報告(全般)

書記 水口大介

☆第54回(2020年度)人文会総会

期日：2021/5/21 15:00～

場所：文化産業信用組合 中会議室

出席者：正担当者18名、復会社1社2名、新担当者2名 計22名

現地出席17名、オンライン参加5名

15:00開始

総会の開催

1 代表幹事挨拶

2 総会議長選出

* 総会議長は書記幹事不在のため代表幹事推薦により販売・企画委員会委員長(水口)が務める。

3 2020年度活動報告

ア) 会活動全般 (販売・企画委員会：水口)

イ) 会計報告 (会計：平石)

4 2020年度各委員会活動報告

ア) 販売・企画委員会 (委員長：水口)

イ) 調査・研修委員会 (委員長：片山)

ウ) 広報委員会 (委員長：岩野)

5 会則の改廃

* 今回は変更の申請なし

6 退会・休会・入会の承認・報告

・退会の報告：御茶の水書房

・復会の報告：日本評論社

7 担当者変更会社社の紹介 勁草書房・晶文社・日本評論社・みすず書房

8 役員の改選および各委員会構成について

ア) 代表幹事選出

議長より片桐氏を推挙。全会員賛同にて片桐氏を代表幹事に選出。

イ) 選考委員選出

出席者による2名連記投票で票数の多い上位4名を選出。

ウ) 書記幹事、会計幹事および各委員会委員長名を選出 【別室】

選出された選考委員4名と代表幹事の計5名にて協議。以下の人事を決定。

会計(片山)／書記(水口)／販売・企画(吉岡)／調査・研修(森)／広報(岩野)

2021年度(第55回)人文会年次総会報告

書記幹事 水口大介

2021年度(第55回)の人文会年次総会は、2022年5月20日、「文化産業信用組合・会議室」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、2021年度(2021年5月1日～2022年4月30日)の活動報告(全般)から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選および各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で片桐幹夫氏(みすず書房)が選出されました。

会計幹事は片山伸治氏(吉川弘文館)、書記幹事は水口大介(創元社)が選出(いずれも留任)されました。委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長(幹事)は、吉岡聡氏(春秋社)が販売・企画委員長(留任)、森卓巳氏(青土社)が調査・研修委員長(留任)、岩野忠昭氏(白水社)が広報委員長(留任)に選出されました。

なお、各委員会の構成は、巻末の「人文会名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2022年8月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁 草 書 房	東原 亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	福士篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠 信 書 房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑 摩 書 房	河内 秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日 本 評 論 社	荻原 弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	片桐 幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事

片桐幹夫

会計幹事

片山伸治

書記幹事

水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会

◎吉岡 聡 ○段塚省吾・佐藤信治・福士篤太郎・郡司恵太・登尾純一

調査・研修委員会

◎森 卓巳 ○澤畑 壘・東原亮佑・河内秀憲・荻原弘和

広報委員会

◎岩野忠昭 ○乙子 智・三木 拓・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行 A5判・平均200頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2022-2023年版

約1,300点(104社)収載。

特別寄稿:井上達夫「ロールズからロールズを救う」

〔掲載分野〕哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学
/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN978-4-915268-52-6



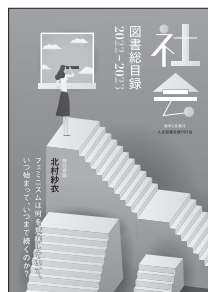
◆心理図書総目録2022-2023年版

約2,000点(94社)収載。

特別寄稿:小俣和一郎「精神医学の歴史と優生学」

〔掲載分野〕心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心理/
精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN978-4-915268-53-3



◆社会図書総目録2022-2023年版

約2,000点(118社)収載。

特別寄稿:北村紗衣「フェミニズムは何を意味していて、いつ始まって、いつまで続くのか?」

〔掲載分野〕社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉・教育/
社会問題/文化文明論/文化人類学/民俗学ほか

ISBN978-4-915268-54-0

* ご注文は書店をお願いいたします。

●人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7(みすず書房内)

●人文図書目録刊行会

同上

TEL 03-3814-0131(みすず書房内)

人文会Twitter開設のお知らせ

このたび人文会ではTwitterアカウントを開設しました。

アカウント @jinbunkai
<https://twitter.com/jinbunkai>

本会の活動やさまざまな情報を発信していきます。公式サイトよりもスピーディーに、また異なる視点からお伝えしていきたいと思っていますので、是非フォローや投稿のシェアをお願いします。



忽ち重版!!

歴史のパラダイム転換にむけて

撤退論

持続可能な未来のために、
撤退する時が来た!

後戻り不可能な地点を越える前に、撤退
せよ! 撤退する日本はどうあるべきか
衆知を集めて論じるアンソロジー。

内田樹 編

1870円



晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

魔法少女はなぜ変身するのか

ポップカルチャーのなかの宗教

石井研士 著

アニメ・マンガに溢れる宗教表象とその
変遷を丹念にたどり、現代文化と宗教性
の絡みあいを解く。

2640円(税込)

1人称単数の哲学

ソクラテスの
ように考える

八木雄二 著

人称や格変化などの分析から言語に表出
する理性の働きを抽出し「いま・ここ・
わたし」の判断と選択としての倫理を浮
かびあがらせる。

3080円(税込)

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

『人文会ニュース』バックナンバー公開のお知らせ

1973年6月に第1号を発行した『人文会ニュース』も既に100号を超えて久しく、読者の方からは過去の記事を読みたいという希望が寄せられることも多くなりました。

また会員社の移り変わりもあり、人文会として保存しておく必要性も高まり、本会創立50周年の事業としてバックナンバーのデジタル化に取り組みました。このたび一般に向けて公開することになりましたので、是非ご利用いただければ幸いです。人文会ウェブサイト、または下記のURLから閲覧ください。



URL <http://jinbunkai.com/contents/backnumber/>

創元社

◆好評「イラスト授業シリーズ」◆

黒木俊秀 神野尚三〔監修〕小野良平〔記〕
ひと目でわかる
脳のしくみとはたらき図鑑
脳のならたちから最新の研究まで幅広く解説
野田稔 監修 千葉喜久枝 記
ひと目でわかる
マネジメントのしくみとはたらき図鑑
A4判変型・上製 224頁・3,300円
A4判変型・上製 224頁・3,080円
さまざまなマネジメント理論をやさしく説明。

大阪市中央区淡路町4-3-6〈税込〉
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111
千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

精神分析とナチズム

フロイト・反ユダヤ主義・ホロコースト
小俣 和一郎 著 ヨーロッパ近代から現代への移行期。
ユダヤ人として生きたフロイトと、彼の生み出した精神分析を、ナチズムとの関係から読み解く。2420円

カウンセリングの理論(上)(下)

(上巻)三大アプローチと自己成長論
(下巻)力動論・認知行動論・システム論

諸富祥彦 著 膨大なカウンセリング理論のなかから実践に役立つ33の理論を厳選し、わかりやすく解説。上巻は、カウンセリングの主要アプローチの概観と比較、下巻は、最新のアプローチを含め、精神力動論、認知行動論、各理論をどう統合して使うかを解説。各2420円

ビッグ・ゴッド

変容する宗教と協力・対立の心理学

アラ・ノレンザン 著 藤井修平・松島公望・荒川 歩 監訳
人類が1万2千年前に、狩猟・採集社会から大規模な農耕社会へ急速に変化することができたのはなぜか。信仰をキーとして心理学、文化進化論、宗教認知科学を駆使し解明したエキサイティングな書。4180円

誠信書房

Tel 03-3946-5666

SEISHIN SHOBO 東京都文京区大塚3-20-6

鶴見 済

人間関係を半分降ろる

気楽なつながりの作り方

人間は醜い。だから少し離れてつながろう。大ベストセラー『完全自殺マニュアル』著者が、生きづらさの問題について20年ぶりに書き下ろした最終的解決法=優しい人間関係の作り方。

共感&絶賛!

定価1540円
電子書籍も配信中

こだまさん

「夫のちんぽが入らない」
「ここは、おしまい地」

この本、私のためにあるのかな。
そう思わずにはいられなかった。

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

メンタルクリニックの社会学

榎原克哉

雑居する精神医療とこころを診てもらう人々
メンタルクリニックへ通う患者、それに寄り添うスタッフへのインタビュを主軸に、現代の自己変容のかたちを紐解く。

2640円

あえて左翼と名乗ろう

スラヴォイ・ジジエウ

34の「超」政治批評

第三次世界大戦前夜の世界で、真に考えるべきことは？
無尽の分析から導かれる、混沌の世界の羅針盤！

3080円

世界は時間でできている

平井靖史

ベルクソンの時間哲学に踏み込んで、もともと馴染み深く、もうと難解な「時間」を紐解いていく。唯一無二の入門書。

3080円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税込)



シャルルドゴール
上巻は1890年の生誕から戦後の1946年まで、下巻は戦後の1947年から1970年の逝去まで、中立かつ客観的な視点から「20世紀の巨人」の脱神話を試みる。
●各8800円

ドゴールを主役にした「20世紀フランス史」
シャルルドゴール 上下
ジュリアン・ジャクソン 著 北代美和子 訳

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

松谷 満

ポピュリズムの政治社会学

有権者の支持と投票行動



橋下徹、河村たかし、小泉純一郎……
かれらポピュリストを、なぜ人びとは支持するのか？

4,400円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

世界大地図帳 九訂版
梅棹忠夫、佐藤久、西川治、正井泰夫 監修
ワイドビューですっきり世界がわかる、日本で最も精密で美しい大地図帳の改訂版。都市人口情報を一新し、上海や深圳を加えた中国の地域図やホルムズ海峡周辺など新図も大増量。



定価26400円10%税込
A3変形判 ケース入

平凡社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp/>

私たちはまだマインドフルネスに出会っていない

心理学と仏教瞑想による創発的対話

杉浦義典・井上ウィマラ 著

マインドフルネスの起源である仏教瞑想と知見を深めつつある心理学。それぞれの視点から生きるとは何か、「私」とは何かを考える。 ■2,640円(税込)

日本の知、どこへ

どうすれば大学と科学研究の凋落を止められるか？

共同通信社「日本の知、どこへ」取材班 著

日本の知が危機的な状況にある。大学の研究費が不足し、多くの現場が疲弊しているからだ。その処方箋を探る。 ■1,980円(税込)

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <https://nippyo.co.jp>

好評既刊

感情とはそもそも何なのか
——現代科学で読み解く感情のしくみと障害
乾敏郎著 四六判美装210頁 2420円*6刷
こころと身体の健康維持に関わるしくみまで紹介。

世界が注目する神経科学者・
フリistonによる「大統一理論」とは？
能動的推論 心、脳、行動の
自由エネルギー原理
トマスパー／ジョバンニ・ペツォーロ／
カール・フリiston著 乾敏郎訳
A5判上製352頁 3850円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込／宅配可

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

《叢書・ユニベルシタス 1143》

エクリチュールと差異

〈改訂版〉

ジャック・デリダ 著／谷口博史 訳
痕跡、差延、脱構築などの概念によって
構造主義以後の哲学思想界を決定づけた
名著。全面的に訳文を改訂、さらに読み
やすくなった新版。 5940円

《叢書・ユニベルシタス 1144》

幸福の追求

ハリウッドの再婚喜劇

スタンリー・カヴェル 著／石原陽一郎 訳
スラングから大戦期にかけて米国で撮られ
た7本の映画が、いずれも新しい女性の
創造に関わる、男女の再婚の喜劇だった
のはなぜか。映画論の名著。 4730円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎03(5214)5540／表示価格は税込です

戦後沖縄生活史事典
川平成雄・松田寛孝・新木順子編
激動の米軍統治下、生活に深く
関わった出来事——一項目を分かりやすく紹介する。 8800円

高まるアイヌ文化へのまなざし！ 15400円 【内容案内】呈
関根達人・菊池勇夫・手塚 編纂
北原モコツツウナジ
ひと・もの・このころの三部構成
で約1000項目を平易に解
説した初めての総合辞典。地
図・年表・索引など付録も充実

◆推薦します
佐々木史郎
(国立アイヌ民族博物館館長)
野田サトル
(漫画家)



アイヌ文化史辞典

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2
☎03-3813-9151 税込

日ソ戦争 南樺太千島の攻防
富田武・ヤルタ密約前後の米ソの角逐から、ソ連による南樺
太・千島の占領とその後。戦闘の全貌と詳細を描く。 5800円
慰安婦問題論
ソ・慰安婦にされた女性を飲み込んだ蔑視と搾取の濁流。
問題の核に迫る注目書。 山岡由美訳 和田春樹解説 4980円

中国の「よい戦争」
ミッター なぜいま抗日／日中戦争なのか？英国の第一人者
が大国の論理の核心に迫る。関智英監訳 濱野大道訳 関智英
訳 4980円
ひとつの心とひとつの世界
スタイン ユング派分析家の国際的リーダーが、ユング心理
学を現代思想へと昇華させる重要書。大塚紳一郎訳 関智英
訳 4980円

みすず書房 (税込)

東京都本郷2-20-7 www.ms2.co.jp

2022年8月25日発行 年3回発行 第141号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉